

# 分科会「ろう女性の歴史」

助言者：伊藤政雄／司会：細川かおる／記録：細川かおる

(1日目)

司会 今までに学会として「聾女性歴史」という分科会を設けたのは、今回で初めてです。私は十数年前から「聾女性歴史」とは？と色々な資料収集しても、いろんな聾女性年配から語って聞いたり、関心を持っていたけど、なぜ、このような集まり場が機会を与えなかったのは、なぜだろうか？

そして、全日本聾啞連盟評議員会時、私から婦人部に対して「聾啞女性歴史」という研究場を設置したらどうか？と提案しましたが、

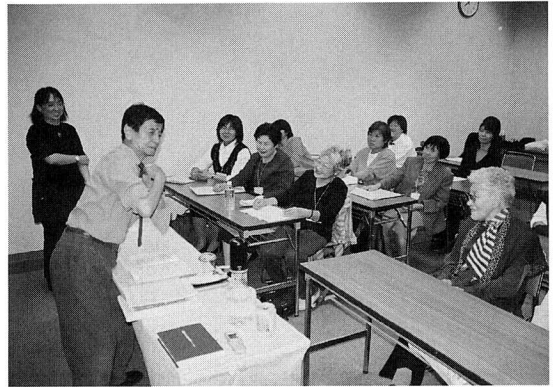
婦人部からは、「すみませんが、やれません」と回

答されたが、私はあきらめなかった。機会を与えてくれるなら、日本聾史学会開催する中でやるしかないと思っていました。2年前で松本大会にて藤田孝子氏が学会において初めて聾女性として、基調講演して頂いた時は、参加者たちが脇見もせず、リアルな内容でした。昔、聾女性は結婚出来ても「子供を生むな！」と世間的で圧迫されたろう女性が断種になってしまった生き方はどうすればよいか？とあの頃は権利がなかった頃、今の聾女性である私たちとして、知るべき！！やっとな、今回で設置出来たのは、嬉しいことです。又、助言者依頼のことも、悩んでいたが、やはり、伊藤政雄さんしかない！！とお願いしたり、追い詰めたり、やっとな受けて頂けました。伊藤さんは聾女性歴史の視野はご存知のようです。今、配った資料は、日本聴力障害新聞、他の記念誌から取った部分です。今、持って来た本の種類は、アメリカ聾女性歴史本があります。残念ながら、英語を読めないけど、貴重な写真とか、載せてあります。とても面白さ記事内容も、なんと、回転バイクが出来る米国聾女性とか。日本も、「聾女性歴史」本を発行するのが、私の夢です。しかし、県外の聾女性年配へ取材するのも、限界という線があるけど、それより、同じ地元として、何回も取材して把握していった方が一番でいい方法だと思いますね。

聾学校にいた頃も、「偉大な聾女性が存在していた！！」とか、あまり知らされなかったし、もともと、聾女性たち自身は自覚がなかったからなのか？あるいは、書店とか、聴者向き日本女性歴史に関する書籍は沢山で置いてあるけど、その中に目が射るような本のタイトルは「近代日本女性歴史人物95人・先駆者たちの肖像」です。この95人の中に1人だけで盲教育に先駆けした誇らしい盲女性教師が載っています。なぜ、このようなケースなら、聾教育に捧げた聾女性にも居たのがびっくりしました。載せなかったのは、聾教育と盲教育とはどこが違うと言っても、聾女性の生き方だって、今にいる私たちも誇りと思えるはず！！又は、確かに隠している聾女性歴史は探っても面白くて深い！！聾女性に出合った時は相手によって違いますね！聾学校の場合は聾女性教師、又は、先輩、同級生。聾家族の場合はお母さん、姉、妹そういう環境によって違いますね。

庭田 この分科会に参加した理由は、聾女性って二重差別(聾者、女性)だと、今までには記録保存がなかったのか？又は、聾啞運動も、ほとんどは、男性が先頭しているし、女性はあまり少ない。もっとなろう女性歴史を知りたくて学びに来ました。

本田 私の両親は聾者ですが、小さい時から見てきたお母さんのこともあって又は、聾女性自身



女性達に笑いを誘う伊藤政雄氏 分科会にて

もなぜ不満のままで泣き寝入りで済んだのか？解決策が知らないままで良いのか？私もろう女性であり、聾女性年配の生き方とか、参考しました。

豊田 初めて設けた分科会だから、関心を持ったし、時代が変わっても、女性はやっけていても、男性は上位のまま。だから聾女性歴史を知りたいから参りました。

宮澤 私の両親は聾者です。もうすでにお母さんは亡くなっているけど、小さい時、お母さんを見て、どういう気持ちを読めなかったけど、母になった頃の私としては、分かるようになって来ました。お母さんは聾女性という生き方はどういう見方したか、知りたいです。

万徳 「聾女性歴史」という分科会に関心あって来ました。通訳する時、聾啞女性年配の生き方を見て、聾女性歴史について学びたくて参りました。

藤田 「聾女性」というのを最初に考えられて下さったきっかけは、故明石欣造さん(京都)から言われたことでした。同じ京都聾学校の後輩だったが、まさに頭がよい方だった。明石さんから「いつ見ても、聾女性は弱いであかんやわ！」と言われました。私の旦那さんは難聴者だけど、聾者と同じく対等に励まして頂いたり、「聾者は弱くて負けてはあかん！もっと、」と言われた。私が結婚した時、子供を生まない方がよいだろうかと思ったが、旦那さんは「こういう考え方はおかしい。生むべき！」と私の家族は「断種を受けるべき！」と言われて、「うんうん、結婚する前に断種してもいいかしら」と旦那さんに告げたら、「なぜ？じゃ、断種受けたら、私たちは別れる！」と言われて「いやいや！！」と結果は、私のお母さんは「ほんまね。旦那さんから言われたことを従って嫁いでいくべき！断種してから嫁さんをやるだと、失礼であかんわ」と言われてほっとしました。娘二人でしたが、最初は旦那さんの両親、兄嫁たちも共同生活したが、主人の仕事で高根県へ移転しました。

その時、初めて子育てという問題で悩んでいました。長女は学校でいじめられても、つらいことを言われてない。いじめられている原因は耳が聞こえない両親だからだとこのような例は同じようにあります。次女が学校から帰りでプンブンで顔が膨れていた。「おかあさん！聞いてよ、今日、学校で言われたよ！「うぶし」(つんぼのこと・島根県の方言)ですって！でも、私は聞こえるもん！」と強くて言い返した。まさか、長女も同じで遭わされたではないかと、長女に問いかけてみたら、「本当のことなの。2年前で入学式から夏休みに入るまで、「うぶし」と何度もからかわれても、我慢した」と言われて、このままでは、いけない！！と思っていた。すぐ、学校の校長先生へ手紙を書いて送っただけではなく、全国にいる仲間の子育てを悩んでいる聾お母さんも同じことを抱えているはずなので、呼びかけなきゃ！書籍、新聞に投稿すると、周囲から同情を買わされると、いや！！結局はありのまま記事を載せて頂けるならば、「暮らしの手帖」という雑誌に投稿しました。

もちろん、苦勞した内容を書かず、私の家族は明るくて楽しいよ！という内容でした。当選して、取材まで来て、「聾者だって、行動できるよ！」と買物、生活はありのまま、写真を雑誌に載せました。全国にも広まり、その時は昭和33年だった。3年後で昭和36年、「名もなく貧しく美しく」映画が出たのは、一部の私たちがタネをまいたきっかけなんです。しかも、私たちは明るい家族だと、それより、映画を作れるような貧しくて同情のある聾夫婦像を撮りたかったそうです。そう、そのろう夫婦のモデル像は実際に居た兵庫県にいた方で、私が話しあったことがあります。最初には私たち夫婦のモデル像を撮影したいと要望あったが、「わたしたち夫婦より全国にいる聾夫婦が大勢にいるので、見向けてほしい」と申し入れました。私たち夫婦の考え方は、

涙を誘うようなオーバーな場面を撮られたくない気持ちが強かったでした。それで、「暮らしの手帖」記事に載せたのを撮影関係者に記憶があって、「娘たちは大きくなっただろう。それでも、実情を撮りたいと要望されたが、それだけではなく、シナリオまで用意されて中身を見たら、全く「名もなく貧しく美しく」と同様に、私たち夫婦が読んだら、理解出来なかった。何故かと言うと、「名もなく貧しく美しく」は敗戦後で語った物語。私たち夫婦は昭和39年だと、同じにしろだと、演じて意味にならない。敗戦してから、19年後に経ったので、聾者たちだって、暗いイメージに見られて困りますね。私たち夫婦の案もあって今の時のままで撮らせていいのでは？と、撮影中で私が奇声をあげた時、撮影関係者らは驚いた。信用出来ず、聾学校や近所や近くの店とか娘たちまで「お母さん(藤田孝子)の声はうまく出せますね？」と尋ねた。「そこまで尋ねるとは、大失礼だよ！」と頭に來ました。娘たちは違和感がなく、「ずっと生まれた時からお母さんの声だって読み聞こえるよ！耳が聞こえない両親でも、活動に頑張っているから普通と変わらないので、大丈夫だもん」ときっぱりで言った。撮影関係者は「うむ、うむ」と半信半疑だったような表情でした。

「もう、娘たちは大きくなっているから私が知っているのは、子供を生まれたばかりとか、まだ幼い子供がいる若い聾夫婦が居ます」と紹介しました。育児を心配している為に祖母が預けられた為に、お母さんは三歳の娘と身振りで会話して時間が過ぎたら、三歳の娘が退屈して「おばあさんの所へ行く！」と泣きわめく場面を見てショックしたおかあさんが「自分の手で育ててはいけない」と自覚が出ました。ある日、私の娘は当時で小学2年生で、学校の親の会あって、あの頃は手話通訳者が居なかったのだから、「先生が何を話しても分らない。行っても、何にならないなあ」と娘に話したら、実際には、メモで筆談して頂きました。お願いしたことはないのに心から有り難くて、誇らしげ気持ちだった。そう、親の会って関心がないとは、言えない。この頃は、ほとんど、「聾おかあさんなんか、学校に来てほしくない。おばあさんが来てほしい」というようなケースが多かったでした。

私はそれでも、許さないし、お母さんという役目あって、やれなくてもやれる！と、学校にOHP機を設置して頂けたのを見た子供たちの目が変わったんですよ。全国にも影響に広がって、いい効果が出て大きく変えたとは、思いも寄らず嬉しかった。

映画の撮影関係者が「聾両親は日常生活とか、ホンマに苦労したね？困っていたことも数えきれなかったね？」と娘にウラでしつこく聞かされて怒った。「もう2度と撮影で家に来ないでよ！」と娘たちが反論した。しかし、NHK取材関係者の場合は、常識的で子供に対してリラックス感を与えて、面白さ話しを持ちかけたら、すっきりと解けこんだ子供たちが笑顔で私たちまで、スムーズに進行してあろのままで撮影を行われました。その時、私は眠っていた心底から起こし、「明石氏、主人からも'聾女性とは？'」と言われたのを思い出してしまって意見投稿の始まりで止まらなかったし、発言出来たとか、周囲たちが「なんや？いつのまにか、孝子さんが活発になったのか？」と驚いた。やはり、周囲たちから厳しく励まされたお陰だろうね。ようやく、昭和45年ごろから手話通訳者が増えました。あ～もう40年前以上になるだとはね…。そう、私の娘である長女は手話が分らないけど、次女なら、まあまあですね。なぜかと言うと、主人は浜田聾学校の美術先生だったので、急に亡くなった後、ある日長女に「聾学校へ美術でも行って見ない？」と尋ねてみたら、「いえ、亡くなったお父さんは立派なので行けない」と言われたから、次女に「じゃ、行って見ない？」と行ったら、聾学校へ国語の授業時間で連れて行った。聾生徒たちを見てカルチャーショックを受け、「うちの両親とは、全く違う！！」と興味を向けて、指文字、手話も聾生徒たちに交流した。おそらく、長女は小さい時、つらい目に合わされて苦労したと思うので、ムリに手話を覚えてもらおうと思ったが、自分からやろうとする気持ちを尊重していました。皆も、同じ思いがあったと思いますね。あらら、長い話しちゃってごめんなさいね！聞いてありが

とう！（参加者たちは拍手がヒラヒラ）

司会 皆さん、藤田孝子さんから話しを聞いたように環境が恵まれたのでしょうか。あの頃の時代なら、自分の奥さんがオレより顔を出すわけじゃない！家に居ろ！というふうだけど、藤田さんの理解者である主人が居れたから、ここまで歩んで来れたと思います。山中福よ先生もそうだった。主人は宮城県立盲啞学校の先生だった当時は、福よさんは先生という姿勢を認めているから、夫婦は同士でありながら、積極的に教師という生涯の道を歩んできたそうでした。その頃は、大正時代だと全国的になかった例が珍しかったと思う。

あ～皆さんも、私もタイムマシーンで乗って昔の場面を見たかった位ですね！まあ、結婚してから女性が変わったか、変わらないのか、というのは、主人によってこうなりますね。今、配った資料と同じく、貼っているけど、もっと拡大文字じゃなくてすみません。この資料は日本聴力障害新聞、聾学校創立記念誌等から聾女性に関する記事を年代代表作成してみましたが、残念ながら古い年代ではなく、戦前の昭和15年頃は、聾啞、つんぼ、オシ、文字が書けないし、読めないし、憐れみの聾女性像という世間体から見方。昭和16年～20年までには、第二次世界大戦の中で、聾の人々は何も情報がなく、聾学校は閉鎖され、聾友達に会えず、ずっと家族と一緒に家にいるまま、又は聾夫婦の場合も、家族が第一で、敗戦するまでには、長いトンネルの中に闇と共に生きて、息を止めた。たった4年間と言っても、聾の人々たちは、何数年間も聾友達に会えないので、手話も止めたから、耐えたと思う。これみたいだったら、今の私たちが耐えられないでしょうね。

昭和20年8月15日は日本が敗戦したのを知った聾の人々たちはなぜか、解放されたように喜んでいた。なぜならば日本を変えたいじゃなくて、聾者同士で会えるからであろう。生活苦から明るく前向きで働こうと聾女性姿が目立ってきた頃です。又は、「男女平等選挙参加制度」も、聾女性たちが政治に対して自覚の始まりという早くも変化を見られた。やはり、私としては、戦前という昭和20年、大正、明治、江戸時代、古い年代の方が実在であった聾女性に関する資料を収獲したいです。

伊藤先生(伊藤政雄助言者のこと)、質問があります。「戦前にて発行した「聾啞界」「聾啞年鑑」等の中に「聾啞女性」に関する記事を載せてありますか？」

伊藤 細川さんが言ったように「聾啞界」は大正3年から昭和15年まで発行ありました。年間4回で発行しました。そう、昭和16年に近づいたら、「紙をムダにするな！」という戦争援助にあたって雑誌、新聞、書籍も少なめページ数に減らした。薄ぺっら1枚になった状況で、「聾啞界」発行する機会を逃れて止めてしまった。「聾啞界」の内容を読んで見ると、聾女性に関する記事は、「結婚問題」「仕事」「育児」でした。特に子育ては周囲たちから見れば、聾啞お母さんが我が子を育てるなんてとんでもない。どうやって発音で伝えて育てられるの？我が子が野生みたいになったら、どうする？とか。聾啞お母さんが母乳を与えている中で我が子の顔に押しつけてしまって、気が付かないままで寝てたら、突死してしまった騒ぎもあった。又は、聾啞お母さんという役目だけではなく、妻として果たすのは、'買物(食べ物) 'ですよ。皆さん、「なんて買物(食べ物)？」と今の買物は当たり前と思っているでしょうが、スーパー、コンビニとかあるから「昔の場合、大正から昭和初め頃は買物時間(食べ物)は何時から何時までだと思う？それはクイズだよ！考えなさい」と参加者たちに聞いた。参加者の中から「朝一番」と答えたら、伊藤さんは「そう！当たり前！！」と手をパチパチ！！「朝一番と言え、朝5時！！」なぜか、わかりますか？朝5時はまだ陽が出ないので、食べ物売り(「魚～生鮮魚～」生魚売り専用、「豆腐～豆腐～要らないか？」豆腐売り専用、「つけもの～つけもの～」と鼻を挟んで声を出す漬物売り専用他)おっさんが小走りしてラッパを吹いながら、「プープー」と音が出た。そういう時代は夜明けしたばかりの早朝で行商人おっさんだけではなく、いろんな行列した小売り、人が通り合った。ラッパの音を聞いた奥さんらは、

自宅のランプ明かりを付けたのを見ておっさんがさっさと、売りに来ます。奥さんが急いであれこれ、注文で買います。「奥さん！毎度ありがとう！」とおっさんがランプ明かり家へ次々と伺っています。だから声を出す、聞く、話すという商売時代だった。そりゃ、一番で困っていたのは、聾の奥さんですよ！何も聞こえないから、ラッパを吹く小売り行商人が来ても全然、気が付かなくて行ってしまう。朝になっても、朝食の支度がなく、慌てた聾の奥さんに叱った聾の主人だという日常生活の1つでした。「参加者の皆さんも考えてみなさい！笑えることはないよ！」昔の聾の奥さんは妻になった以上で役目を果たせるのは、早めに起きて、早朝やって来る小売り行商人に時間を合わせるよう、細かい小銭も記入したメモ(豆腐1丁、サンマ2匹、大根1本)を机の上に並べて用意して窓を開けて待ちます。やっと来た小売り行豆腐屋おっさんに見つけ、手を振ったら、来てくれて用意したメモを一枚ずつで示して、やっと食べ物を手に入れます。又、次もサンマを買う必要で小売り魚屋おっさんが来るのを待つというこんな毎朝で大変ですよ！今は聾の奥さんは24時間スーパーへ購入するのは、楽々だよ！昔と今は全く違う！！

毎朝でやって来る小売り行商人に合わせる聾の奥さんは何倍も苦勞していたよ！こんな生活歴史を語らないと、今の皆さんが分かるわけじゃないですよ。つまり、生活を見ればわかるほどで、女性歴史も深い関わりがあります。そして、続いて子供を授かった時、知恵はどうすればいいの？どこの病院へ行けばいいの？陣痛になった時、主人は慌てて病院へ駆けつけたが、医者、看護婦も話しが通じなかった。昔の場合、病人は家に居て、家内が病院へ電話連絡して医者が馬車に乗って家に来て診てくれます。今は見かけなくなったね。今は、病院に行っても、待っても、並んでも、時間がかかるのが嫌ですね。そう、先にて話したように、聾の人々が生活史を学んで分れば、不便である聾の暮らしは、絶対に工夫出来るはずですよ。ぜひ、皆さんも本屋、図書館とか、行く時で「生活史」本が沢山で並んであるので、読んで下さい。生活史本の中に写真、絵も載っていますから、読めば分ります！

そうそう、「礼儀」も日本流の常識が当たり前がありますが、聾者の場合は、ズレ違っている部分はいくつか、ありますね。例えば便所に、戸を開ける常識は聴者はノックしてから、確認しますね。聾者は戸に叩く音も習慣なんて無縁のようで思わず、戸を開けてしまった中に居た人から怒られたのは確かに多かった。便所に入る前、戸に叩いてから、確認しますね。出た人が「おまたせしました。すみません」とそういう会話が普段だった。聾者は便所の中に人がいる？いない？と戸に叩いても相手からも叩かれた反応が全く聞こえないから、ついに戸を開けたくなる気持ち分りますね。(参加者たちは爆笑！)それだけではなく、もっとも音に関する敏感な所も気になりますね。女性が着物を来て美しい格好になって内股に歩く下駄は音が無いだったら、男性が見向いて「あ～音が無い下駄で歩く女性は絶対に常識的で美しいであろう！」と見惚れて傍に居てほしくなる男性からの一目惚れです。聾女性が美人で綺麗な格好しても、下駄を歩いている音はガラ～ガラ～ズズ～と音を聞いた聴者たちは嫌悪な顔になり、美人な聾女性の顔を見ないで下駄の音を聞くだけで「あんな女性は不美人だ！」と、さっさと去って行ってしまいます。だから、昔の聾女性は意外と女性の外見も中身も何倍もする苦勞だよ！聾女性は恥をかかせないように、小さい時からお母さんが何度も注意を払います。それだけではなく、聾女性が手話を使う時も、着物だと、みっともない姿で笑われないよう、努力しました。「しとやかに女らしく」。又は、食事のことも、先に主人、子供、最後に奥さんはわずかな米の粒を残らず、少量でも、耐えて食べていたとか、今の皆さんから見れば、「差別だ！！」と思いますね。それも、日本の暮らし歴史を変えて時代を見れば、分るでしょう。全日本聾啞連盟婦人部は今後の暮らし問題というのを取り上げているけど、昔の暮らしを探ろうとしないようです。私から問いかけても「昔の暮らしは知る必要がない」と言われた時、本当に残念ではならなかった。

先にて細川さんが取り上げた本「95人近代日本女性史」のことも、明治から昭和の戦前までには、

女性として「なぜ、女は損なの？差別されても、泣き寝入りだけで済ませていいの？」と共鳴し合った女性が団体を作り、自由に思想論を語り、いい国を創り上げていくには女性姿もあり！！と、歴史を作られた女性の生き方を語る本です。「なぜ女って運命？男だったらいいのに！」と両親に恨み、聾男たちはざくっぱらんな好きなように生きるのも、深刻に考えてない！「聾も女もなんて」と、自分も、家族も恥をかかせないよう、耐えて耐えて「忍従」という文字に一生まで忘れてはならない位だった。しかし、主人が女癖、酒癖もなおらず、それでも耐えなくてはならない代わりに泣き寝入りが大勢に居ました。現在はもちろん、こんな主人だったら、妻から離婚を持ちだすとか、判断出来るし、対等になってるけど、実際にはまだまだ問題がありますね。この問題も忘れてはならないことを頭の中に入れて下さい。参加者たちが今晚中に考えて、明日もこの分科会に続いて意見を出して討論して下さい。だって私が助言者ですから、見て聞く仕事なのですよ！（伊藤さんの講演を聞いて参加者たちはニンマリだったようです）

司会 ありがとうございます。皆さん、何か、聾女性について知っていることでも、どしどし、手を上げて下さい。すいませんが、私は司会担当を置いて意見を取り上げたいと思います。なぜ、今までには、「聾女性歴史」というのを取り上げなかったのか？よく考えてみて、年配ろう女性から聞いたり、本を読んで見たら、気が付きました。まず、「聾女性という自覚を持たなくてはならない」の場合は、私から見れば西日本辺りだが、特に中国ブロックのろう女性が目立っているのではないかと思います。例をあげてみると、島根県在住の藤田孝子さんは「聾女性についてこう思う」投稿し続けてきた。又は、広島県の土肥芳恵さん。

伊藤 あ！聾女性有名人なら、この方々です！大阪の谷口久子、山本よしえ、滋賀県の西川はま子、東京の伊東みみ、東条允子、宮城県の山中福よ（黒板に書いた様子）

司会 あれ？山中さんは中途失聴、土肥さんも、西川さんも？他もほとんどなの？

伊藤 いや、伊東さんと東条さんは聾者。今、取り上げた以外の聾女性にも居ますよ。しかし、今、黒板に書いた聾女性は尊敬出来る方々ですね。あ、私から見れば、聾女性の生涯としては、幸せ、不幸の波は1人1人でまちまちです。例を言います。山中先生の場合は、生まれて、幼い時は聞こえなくなって、学校へ学んで、教師になり、夫への別れの哀しみ、生徒に可愛がり、泣く泣く学校から去り、第二人生への教師に赴任、定年、病死の前に孤独を味わったけど、教師の道に捧げた人生として後悔はなかったと言えるでしょう。又は、家族が居る身、家族が居ない身という女性の運命は又、変わる事になります。

皆さんも無関心だと、いけませんよ。悲しい人生を送ったと言え、伊東さん、東条さん、西川さん、谷口さん、山本さん。土肥さんは健在で、もう80歳過ぎています。全体的で見ると、山中さんだけで、生まれた時から死ぬまで何回も乗り越えて、恵まれた運命だったと言えます。土肥さんは賢明な方で聾啞運動の中で話し合ったことがあります。それまで参考させていただきます。

司会 伊藤助言者はインパクト的に言っておりましたね。あ、すみませんが、伊東さんって知りません。東条さんって…もはや、東条首相の娘ではないよね！西川さんはもちろん、参加者たちも、ご存知ですね！口話式方法である有名な西川さんの娘。ほら、漫画コミックに発行した「オーケストラ」の中に登場人物が居りましたね。西川さんは厳格なお父さんから従って、成長し、結婚して離婚し…自分とは何か？と見つめ直して、高橋校長がいる大阪市立聾学校へ勤めて早くも40歳で去りました。谷口さん知りません。知っている人が居ましたら、話して頂けますか？

藤田 谷口さんは、強い女性の方でした。大阪ろうあ協会の大家さんが活動した頃で、力を合わせた中で谷口さんも活発的な意見を言い、活動精鋭でした。山本さんも聾啞活動に関わっていました。この方は戦前・戦後時期でした。土肥さんは、終戦まで和裁仕事一筋でやっていたが、戦後で、協会に誘われて、彼女はもともと話せるので、役に立って活動開始しました。そう、土肥さんは独身なので、あちこちにやれたと思います。私だって同じようにやりたくても、主人は「あちこちで走りまわるとは、困るよ。家に居てくれ」という訳で私はこのままに済ませるなんて出来なかった。だから、新聞記事に投稿したり、活動をやれない代わりにやれたことなので、満足だった。主人が怒らせることはなく、「おまえなあ。私が役員会議後、仲間から孝子奥さんはお元気ですか？記事を読んだよとか、言われたよ。なぜ、皆が記事に関心あるかな？」「じゃ、もう投稿を止みましょうか？」「いや、書いた記事内容は、聾問題、女性問題とかいいことだと思う。私が圧迫できないし、聾生徒に可愛がっているからね。ふう～孝子さんは家事はあかんわ！まあ、聾者の為に書くなら許すわ。但し、オーバーな内容を書かんでくれや」と言われて許せましたわ！そう、主人が亡くなるまで、あちこちで連れて頂き、私は若い男性と話し合うのが楽しくて好きで…。もちろん、主人が知っていたので、若い男性を紹介して頂いた中に伊藤さんも居ましたね。主人が「孝子さんなら、伊藤さんとおしゃべりするのが合ってるだろう」と言われて、確かに意気投合だった。おしゃべりするの、エネルギーをくれますね。私は主人を愛しているので、理解してくれているし、自分も割り切っていたから。主人からいいことを教わったので、大きな影響ありましたね。主人が亡くなった後、20歳過ぎた娘から「お母さん、お父さんが逝ったから、淋しいでしょ？だから、再婚したらどう？」と言われて「とんでもないわ。主人ような男だったら、ええけど、世の中に居ないわ！」ときっぱり言ったわ。ほんまに、今になっても主人に尊敬しています。（藤田さんが恥かしそうに頬笑んだ表情は可愛かったでした）

司会 藤田さんから熱い語りを聞きましたね！会場内まで熱い？そう、ほんまに藤田さんの主人は酒好きでかっぱ絵描きも人間味のように上手かったです。前、NHKテレビに出た再放送「歳月」を見ました。主人は酒を飲んで、和服姿だったので、肩を丸出しで楽しそうにおしゃべりして孝子さんは「よしてよ」と夫婦の会話は自然ムードで印象的だった。そして土肥さんについて知ったのは、私がまだ若い頃、全国大会にて見かけた時、「あの女性はすごいオーラを映えているようだ！」と感じて、資料を調べたら、やはり、戦後初で全日本聾啞連盟理事で第一号です。その時は婦人部ではなく、対等に任務を与えたようですね。おそらく土肥さんを理事になられたのは、地元広島聾啞連盟の協力があつたからでしょうか？うん、土肥さん本人に話し合ったことはないけど少しでも会ってみたいね。でも、年老いているようでムリですなあ。

伊藤 土肥さんは今、90歳で健在ですごいですね。あ、話しを加えますが、伊東さんと東条さんは、皆が聞いたことがない名前ですね。うん、活動的ではないですが、私、大原さん、大家さん、藤本さんらは、この二人のことは有名で知っていましたよ。私として、この二人に話し合ったことがあり、目玉が落ちるほどで知的な女性だし、大きな影響されたし、「新しいモダンな新しい女性」でした。もし、今生きれば、90歳過ぎるでしょう。東条さんは聾者だけど、「家の光り」（農業雑誌）記者として勤めたので、さすがに文才だし、原稿に書けば書くほど、スピードで出来上がっている位だった。私だったら、何回も書き直ったり、原稿を捨ててしまう。東条さんは原稿に何枚でも、書き上げたのを現場に見た以上で、私としては大拍手したい位！

昭和24年、東条さんは「家の光り」記者だった頃、聾啞村長だった横尾さんが居る新潟まで不便な交通でもたどり着けた。横尾さんは感動し、聾啞村長について語ったのを、東条さんは見事に取材で書き上げた！今も東条さんや伊東さんも尊敬しています。しかし、周囲たちは「伊東さん

って遠慮するよ。人格として評判が良くない」と陰に言われたけど、私としては、人格を除いて伊東さんの個性と知的の魅力的だった。普通なら、この会場に入る時は、密かに戸を開けて席に座るけど、伊東さんの場合は、平然で戸を開けて、教壇である机の上に座って「あら！久しぶりね！元気？」と手話、表情もハキハキとした豊かだった。伊東さんは世間を気にするより、「自分は自分よ！」と振舞っていた。男性と対等し、歩くのも自分のまま。しかし、伊東さんは見えない所で泣いたのを見てしまって思わず、「本当の女姿！！愛しい位気持ち」と思っていた！やはり、自分の中に二つ(女の表、裏)も持っているから「新しい女性姿」と言えますね。あら、長い話ですいません。

司会 あらっら、もう時間であと5分で終わります。明日にも続いて、いい意見をお待ちしています！お疲れ様でした。

(2日目)

司会 おはようございます！皆さん、昨夜にていろんなことを聞かせたとと思いますが、何か、聞きたいことや言いたいことも考え出したら、意見をどうぞ。やはり、皆さんも、私も朝だと、頭が回らないですね！

伊藤 おはよう！頭が回らないだとじゃ、私が頭の回転出来る機械操作をお見せしますね。(そこから伊藤助言者が演技サービスショー開始します。ガチン、ガチン、レバーをゆっくりと回って体中も、ガチンガチンと参加者たちも釣られて顔を縦にレバーを回す操作と同じテンポにうなずいてた。)いいかい？ようやく回れて電球が明かしたかな？まあ、意見は自由ですよ。自分の生い立ちでも聾女性という人生体験話でも…。(結局は、伊藤助言者がミニ講演で参加者たちが聞きたがっているようだった)

あ、昨夜にて語ったが、早朝での行商人のことを知ったのは、明治時代物語という映画を見たから想像したし、聾年配から苦労話を聞きましたよ。こんな不便は現在も変わらないですね。例えば、電話が便利と知っても、聾のお母さんはやれないし、子供の病気を近所に伝えるのも身振りでは通じないし、母として絶望されたなど。近所の方を家に呼んで子供の様子を見てくれば、電話お願い出来るようになったといういい工夫を生かしていけるようになったとか。現在には、聾者がFAX、携帯メールとか、通じ合えるようになったと言っても、声だけでかなわない。しかし、いつかは、不便のない時代が望みたいですね。皆さん、小さい時、自分のお母さんから厳しくしつけされたとか、記憶がありますね？お母さんは生んだ娘が聾者でも、普通と同じく心から可愛がって、行儀が出来る娘でありたいから、厳しくしつけしたでしょう。又は、自分の女であることも、大事しなくてはならないことも教わったと思います。それが感謝しなくてはいけない。聾女性の範囲では、一般的から見られても分ってくれない面が多くあります。例えると、聾娘が退屈した時、無意識になると、物に叩く音(手、足)、動作したり、戸を強く閉めたり等は、お母さんが見たら「シッ！うるさい音はだめよ！みっともない姿勢は気をつけなさい！」と怒鳴っていますね。成長になった自分を見て、厳しいお母さんからしつけ下さって感謝していると思うでしょう。まず、自分が女性であること、そして聾であることも認めるよう、「聾の道」に歩かなくてはならない！この場で本当に思ったことを意見を出して下さい。恥かしくありませんよ。自分を語るほどで、語れば、聾女性歴史の為になりますよ。

司会 あっらら！講演下さって。いや、開始時間より遅くなって来て下さったので、罰時間の交換として、ありがとうございました！(参加者たちが目が覚ましたようで拍手がひらひらと)皆さん！伊藤さんから朝一番面白い講演して頂けて良かったね？まず、高齢の方々から体験を語って



頂ければうれしいですが、語りたくても、勇気が出るまでには、時間かかるかな？若い方から高齢に聞きたければ、どうぞ。

本田 おはようございまあす！本田です。高齢の方に聞きたいというか、自分のお母さん(聾者)を見てみて、自分が成長になってきた間で、ちょっと疑問があります。親戚と付き合い方って両親の兄弟、親戚中は皆聴者だし、結婚式、葬式の時です集まりますね。親戚中は手話を出来るのはめったに居ないですね。私の場合は叔父さん(お父さんの弟)が少しで出来るけど、他の方は、簡単な身振り位。うん、結婚式や葬式に来て、親戚中たちは何を話しているか、分からなくて、お母さんに「今は何と言った？」と尋ねても、「いいから、黙って見ていい」と言われた。しかし、いとこたちと筆談、身振りでコミュニケーション出来るから情報をくれて分り合えていた。両親が親戚中と簡単な会話で済ませて本当に十分なのか？と疑問しています。うちのお母さんのように何か、悩みが居るでしょうか？

親戚だけではなく、両親、兄弟も、聴者の間で育てて来ただから、簡単な会話でも物足りないと感じませんでしたか？つまり、心を打ち明けないままで生きてきたのか…知りたいです。あ、私は一人っ子なので、兄弟というのが全くわかりません。そう、今でも、お母さんが「うちのお兄さんは理解してもらえないなあ。まあ、聴者だから、しかたがないです。聾者というのは、差があるからこれでいい、いいかい？代わりにいいことを親戚中に言う必要がない！」と言われて育ててきたんです。これみたいにきっと、高齢の方も体験があると思います。うちの両親はろう学校の寄宿舎生活が長かったから、夏休み、冬休みには家に帰っても、家族の会話は多くは無かった。そして卒業後で自立して仕事やって、結婚しても、自分の両親に慕う気持ちが薄かったです。自分の親で血がつながっても、他人みたいな姿勢だった。こういう同じような気持ちがあったと思います。

高橋 そうと言えます。私自身も、数えきれないほど心の中に押さえてきました。結婚前は、お母さんが居たので甘えてきましたけど、結婚後は、自分でやらないといけないだと、特に病院で医者と筆談したメモを持って行って、お母さんに尋ねて教えて頂きましたけど、繰り返しのようでした。主人の実家は恵まれているので、嫁という私としては肩身のせまい気がしました。お客様がお見えになって、お茶を出して、何も言わないでじっと座りこんでいたままでした。お客様が帰った後、主人の弟嫁に「今のお客さんはなんて会話したの？」と尋ねたが、「なんでもないよ。もういいよ」と言われてどうしても、腹が立ちたいけど、辛抱しました。「なぜ、私はここに居るの？嫁と言ってもわかるけど、皆と楽しい会話して生活したいのに…。嫁と言う役割を働いても、理解できないほどで、暮らしていいのでしょうか？主人の兄嫁が居たけど、尋ねても「いいよ」だけだった。こんな毎日でしたが、ある日、主人の妹が来て、「今は何？先にて何と言われた？」と攻めたように尋ねたら、義理妹は手話が出来ないけど、手のひらに筆談してくれて分り合えて嬉しかった。やっぱり分り合えないと、いい気持ちになれなくて家に居られないでしょう。分り合えば、この家を好きになれるでしょうね。だから、皆さんも同じことを味わえたと思います。聾者として、一番で忘れてはならないことは、筆談出来ることです。故山中先生から何度も言われました。「筆談は書くだけではなく、読むもの、考えるもの、日本語を覚えなさい。聴者と会話出来ない代わりに筆談は大事」とのことでした。ほとんどは、聾者が文を読んでも、分るフリが多かったです。そう、私の主人もそうでした。お客さんが訪れて来て、私はお茶を出して黙って見るだけで、お客さんが筆談した内容を読んで主人がうなずいたままだった。お客さんが帰ったあと、私がこの筆談したメモを読んで「この意味は何？」と言ったら、主人は「おや、分からない」と。私は「なぜ分るフリしたの？」と言い返したが、私もこんなにならないよう、筆談した部分を

指してこれは何ですか？教えて下さい」と恥かしがらないで相手や近所に尋ねたことがあります。やはり努力しないし、一番で勇気が要りますね。（高橋さんが「外向性」「内向性」という言葉を黒板に書いた）

私は小さい時はお母さんに甘えて、怒られると泣くし、喧嘩も嫌いで気が小さいだった。結婚してから、主人から「人付き合いが大事」だと大事なことを教えてくれて、一段と勇気も与えて頂きました。人付き合いは良さ、悪さでもありますが、人間だからですね。

庭田 そうと云えば、私が知っている聾女性年配のことですが…。なぜか、家族として聾女性兄弟姉妹の中にいる場合は、両親から聾女性にこのように言われます。「いいかい？うちの兄弟や姉妹の中に聾妹、聾姉が居ることを言いふらさないように！」と注意されたように見られるのは、なぜか聾女性だけです。聾兄弟なら「聾兄がいる、聾弟がいるって。聾男性としては、特に意識がないです。そう、結婚式や葬式にも、集まった親戚の中に手話を使っている聾女性だと、厳しくされます。聾男性の場合は、うるさく言わないです。う～ん、聾女性として見方のタブーはなぜだろうか？私から聾女性年配に「聾である自分を出し切っていいと思うよ！」と助言したけどやはり、時代によっては違うでしょか？

司会 先にて言っていましたように、聾女性としては、「自覚」「誇り」を持つべきか？世間体を気にして自分を押さえていいのか？又は「私の聾兄弟、聾姉妹も居るよ！」と胸を張って言える方が居ますか？

西山 私の妹は聾者です。又は、妹の主人も兄弟の中に聾者は3人が居ました。その時、妹の結婚式で親戚中を呼んだ上に、手話を使ってもいいのか？と迷ったけど、結局は、開放的で手話を話し合えて、親戚たちも気にしないで気軽に楽しめました。両家の両親も聾というのが否定はなく、「もし、聾児が生まれてきたら、気にしないでね」と言ってあった。生まれてきた子供は聴者で何も無かったでした。私の娘は難聴だが、現在は聴力が下がっています。私の両親は聾の恥を隠すより、自由に育ててきたから、問題がなかったわ 自分も恥を感じなかった。

庭田 すみませんが、確認したいです。先にて話したのは、私の祖父、祖母、私の姉しかし、聾者である本人として、悩みがあった。相手に「聞こえる子供を生んで良かったね」とか、私の祖母の妹が聾者ですが、私を見たら、「シッ、シッ」と手話を使わないように、表情を伝わって言われたんです。聾兄弟がいる聾男性の場合は、気にしないで行動しているのに、なぜ、聾姉妹がいる聾女性の場合は神経をとがらせるという私より25歳上で60代の聾女性が絡み合っているんです、ひょっとしたら、広島だけかな？

西山 う～ん、やはり性格問題でしょうか？いえ、あの時代なら見栄を張っている聾女性が多かったのでは？

庭田 そうかな。あの時代は、聾女性自身としては劣っていた気がして強かったではないか？そう、「聴者はいい所！聾者なんて、役に立たない！」と言われたことが多かったので、その基本的には、どこで受けられたのか？私は小さい時から疑問を感じたです。ある結婚式の時も、こっちは親戚の中で聾者数がいた為に、相手の方は聴者だけだったので、私がいつもと同じく、手話でかけたら、聾の叔母さんは「手話はおよし！」と注意されて、聾者同士が口話で会話するのを見てショックでした。なぜ、自分が聾者であることを隠すだろうか？このようなケースは皆もあるで

しょうか？

司会 はい、先にて二人から異なる意見がありましたね。庭田さんからは、「聾者である自分を認めたくない」という聾女性。今の時代が変わって来たので、平然と手話で話せる時代が来たようですね。あの時代は「聾者である自分を押さえた方が周りの為になる」と思っていたかもしれません。

伊藤 おお！先にて、いい意見を出せたと思いますよ！聾であることを探って腹を割って話し合える場が大事です！そう、私も経験があります。親戚中が集まった場で、私のお母さんから「いいかい？いい子して礼儀も笑顔も」と言われた時、心底は納得出来なかった。しかし、実際には、私が話せないから、ずっと大仏のように、動かないまま、ご馳走したり、自分だけ隅っ子された。そういうことは、皆も同じだったと思う。大仏のように動かないって、それが聾者として、最高の礼儀だったら皮肉と言えるかも？集まり場で、じっと居られるなんて正直に言うと、耐えられない気持ちは分るね！悪いことをやった人が檻の中にじっと居るなら分るけど、聾者だって、悪いことをやってないのに、じっと居られるとは変だろう！そのことは、世界中の聾者と共通点でありえるんですよ！聾者だって、手話を表れるだけで、聴者たちから見られる目を気にして、手話を止めますね。私も、親戚たちの目が数々ほどで見られて「私は最低人間なのか？何も言わず、黙っておとなしくした方が賢いなのか？」と感じた。

それだけではなく、食べる音、嘔む音、飲む音までいちいちと注意されて、嫌な思いしたが、数年後、今に考えてみると、聴者は音の世界、聾者は音のない世界だから、聾者らしくわきまえていいじゃないかと思っています。又は、自分が聾者であることを分っていても、無意識の中で「電車の中に、外にいる方は全てが聴者…。私だけで聾者なんて」ということを皆も思い浮かべたこともありますね？それは不要と思えばよいですよ！もちろん、「私は聾者だ！手話を話せるだ！堂々と聾者と言えるだ！」と考えを持った方が気楽は一番だね。しかし、今の時代は良くなったと言えないし、まだ…まだある地方に残っているかもしれません。聾者同士で同感あれば、手話を使っても聾者であることも、恥かしいなんて不要！例えば、胸を見られたら、恥かしい気持ちだって当然でしょうね。聾者である誇りを持って歩くべき！

藤田 私は京都生まれだが、結婚の為に兵庫県である港の近くで4年間に暮らし、島根県へ移転し、20年以上になります。やはり、地域的で習慣も違います。ですから、聾者の見方、聾者として思い方も異なります。そういうような聾年配から聞いたことがあります、理解出来ない面がありますね。例えば、実家は京都の田舎でしたら聾学校の寄宿舎生活の為に過ごした聾者の場合は、卒業後で実家にいると、近所に笑顔で挨拶しても全く話しかけて来ない。笑顔で挨拶するのは表だけです。それに、お婆さんが「家に遊びに来てね」と言われて、私は喜んで伺ったことを、私の両親から「あかんわ！あれは、建前だよ！」と怒鳴られました。京都の習慣はね、聴者が「どうぞ」と言われて聾者が喜んで伺った態度を見たら、「厚かましいやわ」と陰に言われます。「どうぞ」と言われても「いえ、おおきに」と。「どうぞ」と2、3度目も言われたら、「ありがとう」と言って3度目の言葉に従って伺います。しかし、家に上がって、出してあるお茶を飲んではいかんです！「お茶をどうぞ」と。「いえ」と。「どうぞお茶を…」と2度目ですすめられたら、「おおきに」とお茶を飲んでお菓子を食べます。

隣である大阪でも、大違いです。島根県も同じ県と言っても地理を見れば、長方形です。お城である松江市は、口が上手(騙すのも、上手い)で社交性あるけど、限界でした。そして、浜田市へ移転したら、港で船が多く、韓国に通るし、広島に近くて、行商人も多いせいで開放的な所は、私としては合っていました！その時で同じ県でも習慣性が違いだと、学んだ一つでした。松江市辺

りは、聾者を見下して、「おまえはつんぽになっちゃったのは、先祖が悪いことをやったからな！罰にあたって聾者に生まれて来た！」と言われます。聾児は見えない所で山中に置いて生活し、戦後になると、聾児を集めて来て年齢はバラバラだが、聾学校に入ります。しかし、会話出来ず、両親が「聾学校はどうでもいい！早く働いてくれ」と小学6年卒業し、中学中退して働いた為に、正確な情報が入りません。それだけではなく、「聾者が集まり場なんか、行かない。バカになる」と情報を届かない聾者から言われたが、何度も説得しても、ダメだった。

この聾者たちは病気になり、半身不随になっても、兄弟から冷たく見捨てられ、そのまま死ぬか、老人施設に入れます。その時、初めて気が付いて、周りは聴者ばかりで心寂しくなり、自分の家に帰りたがります。私から見れば痛感しますが、出来るだけで手を述べたけど、限度あります。この聾者たちは60～70代が多く見られています。だから、私から若い世代に「両親に頼ってはダメよ。自立して聾者として自覚してやりなさい。又は、悩みごとは聴者より、聾先輩に相談した方がいいよ！自分が成長になったのに、まだお母さん(聴者)に任せては絶対にいけません！」と助言しています。

う～ん、島根県の田舎は、意外と両家の血統を重じる為に、血がつながる同士で結婚が多くて、生まれてきた聾者数が多いです。又はよそ者だと、受け入れてくれないんですよ。今は変わって来たので、大丈夫です。実は、私としては悲しいことがあります。うちの母さんから言われたのは「聾の姉はおまえがいるだから、妹は誰も嫁にもらえる相手がおらん！」だと。私は腹にたっしておさまらなくて、幸いに好きな男性が居て、さっさと結婚出来たのは、私の家族の為だった。うふふふ…普通なら、私が嫁に行くなら、悲しんで別れを告げるべきなのに、あまりにも嬉しいな顔した私を見て、両親たちは「なぜ悲しんでないの？」と納得できなかったようだった。田舎はね、結婚式、葬式とか、必ず聾者の顔を出してはいけない習慣がありました。目、足の不自由なら憐れみに理解しているのに、聾者の場合は、意外と行動が出てしまうし、余計な手話、奇声も出てしまうから怪物と同じ扱いにされる。私も、当時でお母さんからこういう扱いされて悔しい気持ちだった。

しかも、嫁いだ主人の所は、よそよそしい感じはなかったでした。主人の両親も聾の嫁さんを頂いた以上で、何も言わず認めて頂いて、又は親戚たちも、手のひらに会話したり、特になかった。親戚たちは主人のことを尊敬しているから、嫁である私まで対等な扱いして頂けて嬉しかったでした。でもね、私は田舎の方言のカタコトなら、声を出せる位で出来た。主人は京都有ちだが、島根県在住の聴者に話しても聞き取れなかった。そう、不思議なのは、地域が離れているのに出雲弁は東北弁は似ているだと、聞いたんですよ。私は講演で参った地域の人と話し合うとか、旅に出るのも、どれどれの地域の特徴点を探って学ぶのも歴史も好きです。

本田 先にて藤田さんが言いましたように、確かに東北地域性も違ってきます。私の聾友人である秋田生まれだが、この父は秋田生まれで聾者だが、母は八戸生まれで、難聴者です。それで、聾家族という話題になると、ズレてました。八戸生まれのお母さんは「手話なんてみっともない」と。小さい時から注意されてたので、なぜだろう？本田さんも同じだよな？と言われて、「いえ、うちは開放的で電車でも、外でも、手話で話し合ったよ」と言った。又は、別の青森の聾友人もそうだった。特に青森県辺りは見方が強いだろうか？私は宮城県生まれでラッキーかな？いや、いい環境に居たと思うかな？

伊藤 言えます！地域的だけではなく、全国中も同じ例外があります。東京だって、お母さんが、自分の子供が聾児であることを恐れて「しっ！しっ！黙りなさい！」としつけされた聾児が「だめなの？」と不満と疑問を感じながら大人になると、こんな体験を語ると、全国中も一致です。ア

メロカなら、200年前は聾者というのが見下したが、現在は理解になってきます。200年前なら町に居た聾者たちが手話で語るのを見て、カウボーイ連中たちは「なんだ？変な身振りしている！本当に耳が聞こえないのか？」と試して、銃を上に出したら、聾者たちはまるっきり気が付かないのを見て笑いごろけていた。「なんだ！聞こえないのか？面白い」と得意そうに銃の煙を消そうとする。それを見た聾者たちは侮辱されていた。皆も同感だろう！アメリカだけではなく、世界中の聾女性たちも、このように同じことを語っています。どうぞ、日本だけで聾者を見下していると思うが、実際は、基本的で各国の事情と同じである。

しかし、息子である日本聾男性の場合は、身だしなみ、常識外れしているのを見ても、お母さんから何も言ってもせんね。娘である聾女性の場合は、外見が第一で重視したし、男性より3歩に下げて歩いてたのは、日本の慣習性だからでしたね。聾男性が大きい身振りしたら、後ろに居る聾女性も同じにやるわけにいかないよね。だから男らしく、女らしく見かけが強い時代だったからね。着物姿した聾女性が手話で着物袖を見苦しくならないよう、手話を表す大きさに限度を感じておりましたよ。今は、洋服だと、自由に手話を表すから、まさにファッションに関すると言えますね。又は、家の場合は昔なら、廊下を造るのが簡単で済ませた為に、歩く時、ガタガタで余計に聞こえてしまう。今は進歩的で機械に設備しており、歩いても余計な音が出てません。だから昔には、廊下に歩くだけで聾者が苦心になるほどです。聴者は、廊下の様子に合わせて音を立てないように、歩きます。聾者は廊下に踏むと、間に合わず、余計な音が出てたり、又は、戸を開ける時も、スーっとするように古びた戸でも、音を立てないように開けるだけで、油断出来ない聾女性としては、何回も練習させられ、泣かせましたね。しつけイコール音をたてないというのを「お嫁さんになれる」ということを忘れてはならない位でした。

昔は便所の鍵がなかったから、入る前に「居ますか？」と声をかけてみたら、「はい、居ます」と返事が来て、前に待ちます。聾者なら、声をかけないからこそ、戸を開けてしまうので、中に居る人が怒鳴ります。やはり、便所は見えない戸が閉まっているので、「いるかな？いないかな？」と思ってもノックしても、中に居る聴者が言われても、戸迷っている聾者が戸を開けたら、怒鳴られてしまうペースは何回もありますね。皆もあつたね？私も経験ありました。(会場内爆笑！！)

現在は、自宅でもトイレの鍵も設備してあり、何もかも安心出来る生活を目指して建設プランをたてるようになりましたね。よく見ると時代が変わると、建設便利さ、聾者の手話普及も広げたという発展になった線は同じで不思議ですね。手話通訳になる為、学んでいる聴者も「聾者の友人から教えてもらってます！」「まだまだですが、手話を覚えて頑張ります」とか、助け合ったり、聾者は誇りを持つべきになっていますね。

しかも、50数年前なら、聴者は聾者がいる場で一生懸命に手話を覚えたら、周りにいる聴者たちに「これは手話ですよ」と言っても、「何よ？気持ち悪い！」と批判されます。「おまえ、聾者ではないのに、なんて手話を覚えるのか？バカと同じだ！」と言われて傷ついた聴者女性がこんなことを言われた友人に従うべきか？それとも、聾者の為に助けてあげるべきか？と泣いて泣いて、迷っていた。結局は、友人を絶交し、聾者の為に助けてあげるという気持ちを決心し、数年後はりっぱな手話通訳者になられましたよ。それは本人から聞いたので実話です。あの頃、差別された時代の中にやり抜いた手話通訳者の聴者女性も、生き抜いた聾女性も、同じ立場にいたと言えます。今後も、お互いにいい方向へやらなければならないと思います。

司会 おや！会場内はムンムンで熱くなりましたね！さて、意見したい人が居りますか？

狩野 質問する前に意見を言わせて頂きます。昨日、基調講演を話して下さった高橋さんからの

聾教育については、感動しました。当時で聾学校に居た聾教師の山中先生に出会えたから、聾という心を生まれたことについてです。聾者自身が手話で語って、日本語を身につける為に筆談やれるように助言して下さったのは、聾として、人間として、又は聾女性として、プラスを生かしてくれたと思います。高橋さんは聾教師に出会えて又は、第一言語は手話を身につけたという聾であることは私から見ればうらやましいです。

私は口話で、いつも聴者に追いかけて目指したけど、自分の聾両親、聾先輩から聾というのを教わりました。昔の場合は、聾男性が活動の為にあちこちへ行き回り、結婚した聾女性が家を守り、なかなか、自由出来る時間がなかった。東京なら交通面がよくて、聾者同士が会えたけど、田舎の場合は、そうにはいかなかった。だから文通する手段しかなかったの、口話だけで習った聾者の場合は、日本語を書きたくても、書けないということでいつの間にか、孤独になってしまったそうです。だから聾という自覚意識が出にくかった時代と思われる。聾教育の流れも関わりがあります。聾教師がいるからこそ、聾児たちが聾と言うのを目覚めており、比較的を見てみるほどで前向きが見られます。聾教師が去った後、聾というモデル像が居ない為、聾児たちは聾というのを薄めて、又は、全く意識が無いだと、思われます。なぜ、昔は聾という意識が強かったのか？おそらく、聾教育が変わると共にこうなったのでしょうか？

伊藤 よい質問してくれた！詳しく話したいが、時間がかかりますよ。聾者はろう教育からはじまった中に、見えない部分関わってあります。経過の原点を分れば、今後からは、あなたが使命になれるでしょう。しかも、私からポイントを話しても、「うんうん、」と分るだけで効果が出ないです。それは、聞いて分って活動していくより、自分の自分の眼で見て感じ取ったり、味わえば、間違いなく、濃い内容を活動していけます。例えば、今、分科会で話し合う時間は、たった1時間だけですから、毎日会えるわけではないですね。だから探るためには、毎日考えて、今の聾女性年配たちから聾教育の様子を聞いたのを「それはなぜだろう？」と、繰り返しながら、研究資料作成しておくに重ねます。体験話して頂いた方々によっては、考え方がまちまちなので、じっくり聞いてあげて、後は自己判断して貴重な資料に重ねます。それなら、あなたが絶対にやれますから、頑張ってください。

司会 狩野さんから意見あったように、聾女性年配たちが生き立ちや、聾教育に生かされた体験を語って頂ければ…居りますか？

細川 宮城県在住です。私としては、一番と言え、聾の娘を生んだことです。結婚した当時、私達は聾夫婦で身ごもっていました。臨月時期頃で、私のお母さんが心配で健康状態とか、石巻の実家に帰ったらどうか？と手紙が来ました。昔はFAXもなかったので、近所の電話にお願いしても、やっぱり、手紙は心強いだと思いました。私のお母さんから「実家に帰りなさい。万一の場合は心配」と手紙に書かれた通りで石巻の実家に帰りました。しかし、一週間後で朝早く、身体は妙な感じがしました。出血が止まらず、外に出て「お母さん！」と声を出したら、お母さんが来て慌てて何枚も布を押さえて急いで病院に運ばれました。その時、私の三番目である兄嫁さんが「あんた、もし、こんなことで仙台だったら、どうなったのか？主人は聾者で、あんたが悲鳴をあげても、聞こえずに手遅れで死んでしまうでしょう！石巻の実家に帰れて良かった！」と言われました。そして娘が生後6ヶ月頃、仙台に戻したら、主人の義母さんは「耳が聞こえるかい？聾者だったら？」と痛いことを言われました。義母さんからの話によると、義父さんは警察署に勤めた時、栗原、黒川…地域で「聾者が聾者を生んだ」という噂で聞いたので、気になったんです。義母さんは孫に何度も、洗面器に音を叩いたが、孫が反応がなく、スヤスヤで眠っていた。「あんたの兄弟は聾者が居たの？」「もし、聾者だったら？」と何度も聞かされたり、結局は聾者だ

と分っても、義母さんに言い返さず、心底に苦しんでいた。しかし、私は負けず嫌い性格なので、娘が3歳頃で絵本を沢山買ってあげた。私達夫婦は内職(紳士服、洋裁)に集中したので、娘は周りに本が並べて1人だけで読んでいた。幼稚部に入れなくて、毎週土曜日だけで聾学校へ通いました。

まだ娘は手話を身につけなかったので、まず、日記に絵と文を書いたり、「今日のお天気は?」と尋ねたら、「くもり!」と簡単な身ぶりしたり、読み取りしたり、教えました。ある冬で雪が積もった時、小学1年だった娘が「雪がたくさん積もっている!学校は休み!」と身振りで不満に言われたが、雪でも、雨でも、強い風でも、私は鬼になった気持ちで娘を聾学校へ通わせました。自宅から聾学校までバスで乗り換えて約1時間にかかりました。娘が専攻科卒業前に就職探して仙台市内を希望したが、先生側が東京行きという考えに嘸みあわなくなった。そして、祖父(主人の父)が納得出来ず、聾学校に行った時、先生たちから孫について初めて聞いて知ったことでした。いつも、祖父と孫が筆談していたし、分っていたと思う。娘がまだ学生時、高校野球大好きで、甲子園まで応援に行ったり、あちこちに旅行して遊んでいたことも、私も主人も娘が好きのようにやらせてあげました。娘が社会人になって、勤めるのも学ぶのも、頑張っているのを見た祖父と主人の親戚たちが分ってくれるまで、時間がかかったけど、今に考えて見ると、母としては後悔がありません。

司会 言えることがありませんけど、ちょっと、司会を置いて話します。そう、私は聾家族の中に育ってきたが、祖父のことは尊敬してました。いつも、日本語を修正してもらったりしたけど、手話を認めないという頑固な祖父を分っていたつもりで、小さい時から祖父が死ぬまで筆談して来ました。やはり、私は手話も日本語も好きで、バイリンガルを身につけるのも必要であります!

太田 宮城県在住です。私は聾学校中学5年卒業後、実家に居ました。その時、知人が結婚仲介として、見合いみたいな話を持ちかけて来た時、相手のことは一度も会ったことがなく、顔も全く知らないでした。主人は無学で兄弟の中に聾者は3人が居ました。嫁いだら主人の家は、夜になると、電灯が一つも無く暗くて、朝明けると、山々、田んぼだけでの光景を見たら驚いて、厳しい冬でも百姓して過ごしました。「結婚したのは、間違いかしら」と悔やんで、時が過ぎたら、実家へ帰りました。私のお父さんと一緒に主人の所へ戻ったら、お父さんは主人の家族に言いました。「わしの娘は聞こえなくても、ちゃんと聾学校へ勉強出来たし、和裁も身につけたです。可愛い娘をお嫁さんに行かせた所に主人は学校へ行けなかっただと…娘を考えてみるだけで、心配だ!」のことだけではなく、生んだ子供は発音が遅くて、歩けたのは3歳頃で私のお母さんは心配してくれました。生んだ子供は4人、全て健康で安心しました。しかし、同じ聾者である主人でも、無学の為に手話を身につけなかったのが、会話に通じなくても、我慢してきました。私の主人の弟の妻(義理妹)も同じく辛い思いをしていました。「なぜ、聾の子供を学校へ行かせなかったのか?それでもほっとらして次々と生んだとは、なぜか?息子は聾者でも大事しなかったのか?主人の両親は何を考えていたのか?主人の家族は生きる為に、ウサギを捕まえて食べたのも…」私から見ても納得出来なかった位で情けない気持ちを感じました。今は町に引っ越して暮らしているので、安定しています。

結婚当時は無学だった主人と会話しても同じ聾者でも、なかなか通じなくて辛かった。「本当」という手話表現はあごにケという指文字手型で2回と叩くのに、主人は喉の部分に人指し指と親指に合わせて2回と動く。「ウソ」の場合は額にケという指文字手型で叩くけど、主人の場合は「好き」という身振りで表す。「男」はなんと、こぶしを表します。それが、私は全然分らず、困って

いた。「女」の場合は「六」というの数を表す。主人は無学でも、こんな身振りを覚えたのは、村の範囲で独自に身振りして覚えていたでしょうね。時が過ぎれば、通じるようになり、振り返って見ると苦労あったけど、もう子供達は自立し、安心しました。山奥に嫁いだ時、初めて見たし、家があるのは、私達と離れている他人の家だけで、買物する時も遠くて不便だった。

司会 あ、確認したいですけど、主人は結婚する前まで一度も顔も名前も知らないだけではなく、初めて顔見合わせて、そのままに結婚したそうですね？結婚してから何年目になりますか？

太田 そうです。今、結婚してから52年目になります。

豊田 私はね、聾者のおばあちゃんという友達があります。1ヶ月1回でおばあちゃんの家へ遊びに行っているいろんなことを聞いてます。その話が忘れられないことがあります。おばあちゃんの友達が悲しいことです。そのおばあちゃんの兄弟で5人が居て、その4番目だが、家族から痛い目に合わされ、これ以上で我慢出来なくて家出しました。なんと、まだ小学6年の時で覚悟の上に、身に持てるような荷物だけで家を出て汽車にただ乗りして、貨物専用車に隠して寝ました。もう、終着駅に着いたようで、どこの駅なのか、わからなくて動かないままで国鉄係りが少女を見つけ、「どうしたか？」と話しかけられたけど、聾少女は分らず、通じなかった。その駅は、東京駅だったので、国鉄係りから交番に尋ねました。当時、交番は東京聾連盟幹部名簿にあったので、通して連絡を取り合った。

当時は、聾者に関する問題の場合は、必ず、東京聾連盟幹部に連絡を取り合えるように義務がありました。そこで、連絡し合って幹部である聾夫婦がかけよって来て聾少女を預かって育ちました。聾少女は学校も通い、和裁も身につけて成長し、これからは、自立していくように、今までにお世話になった聾夫婦に感謝を込めて、家を出ました。それで、幸せに結婚出来ましてなんと、相手は20歳も年下ですよ。ある日、聾おばあちゃんたちの旅行企画あって、私は望みたくて参加出来て、やっと聾少女の事のおばあちゃんに話し合えました！意外と、若くてお洒落な格好して唖然しました。たくましく生きられてきた姿を見て、考えられました。まだ小学6年なのに、自分の家族にいじめられて、自分の為に家出したことや、家族へ絶縁したことも…昔の頃だと、聾として女性として生きる為にこうなったのは、私としてはすごいと思っています。おばあちゃんは今も、家族については、全く無関心になっています。あの、このような同じ思いさせられた経験があるでしょうか？聾、女性、二重でも、自分の為に生きるのはどのように決断したのか、自分から見方、考え方でも意見を聞きたいです。

伊藤 あ、この話を聞いたら、思い出して今から10年前である地域へ私は講演依頼されて行きました。ある手話サークル主催で講演をやった時、「聾者がいますか？」と手をあげたのは4人位で少なかったでした。その時、一番前に座っていた聾のおばちゃんが居たのを見て気になったんです。講演後、休憩時間の時、聾のおばちゃんに「あなたは聾者？いつから聞こえなくなった？」と手話でかけてみたら、おばちゃんはずなずいて「聾者、ずっと聞こえないだったから」と言われ、「聾学校は？」と尋ねたら、「学校は行ったことが無い。私は57歳。私は山奥で生まれて育てた。まだ幼い頃、病気になっても両親は山奥だと、病院へ遠くに行くわけないことでほったらかして治ったら、前みたいに声を出しても反応がなし。結局は聾者となった娘である私でもほったらした」と言っていました。

しかも、大きくなった体も女頃の聾者娘を見て結婚したのは聴者だが、家柄もお金も無かった。それで夫婦になった二人が会話不能でも、農業に関する同じパターンで身振りに通じたから、



特に困らなかったし、子供も生んで30年間も育児、農業に仕組んでいた。54歳の時、隣家の人が「あんたと一緒に行くだよ。車に乗って」と身振りで言われて、聾おばさんが急いで身だしなみして一緒に出かけた。おばさんは車窓から見慣れない街を眺めて生まれて初めてだった。着いたのは、手話サークルである公民館に居た人達は、大勢の聾者が手話しているのを見たり、知らない聾者から美味しい弁当をもらって一緒に食べて、皆が笑顔で身振りにかけられたのは、聾おばさんは今までに無く、初めて気持ちを伝わって感動した。

そう、聾おばさんとしては、54年間の中に運命的で出会った場であり、初めて幸せをつかんだようだった。「車で案内してくれた隣家の人に感謝しており、今までは、私がひとりぼっちで毎日に退屈だった。農業、育児、家事というしか考えがなかった私にとっては、当たり前だと思っていた。だから私と同じ聾者が居たのは、嬉しかった。又、一週間後も行きたい！」と聾おばさんが要望された通りに、手話サークルメンバーが車の送迎交代で乗ってくれて通った。聾おばさんは最初、手話が分らず、手話サークルに通っているいろんな人と話し合ったり、眼から学んだり、1年後になった頃は、驚くほどで、なんと手話がスムーズに上達していた！聾おばさんは無学だったので、文を読めないし、書けないこそ、手話なら身につけたとは、信じられないことで周囲達が言った。

私から見れば、おそらく、聾おばさんは頭が良いだったかもしれない。つまり、聾者であって手話も学んだのも知らずこそ、眠れていた能力を長い間から覚ましたように手話を身につけた当時から早くも芽が出て、能力も伸びていつの間にか、大きい木になったような聾おばさんの姿だと、私としては強い印象的だった。実際に聾おばさんから聞いた時は、私の心が碎けて泣く位で気持ちを抑えなかった！今に思い出すと、涙が出る位で事実にあった話だから。

そう、聾おばさんが54歳から手話を覚えて上達になったのを、聾学校に学んだことがある同じ年の聾者に比べても、驚くべきの差が出た。私と話し合っただけで話が分るほどで面白くて頭が良い方です。この聾おばさんのような世の中に居たとは、初めて知った時は感無量だった。又、聾おばさんの性格も明るくて、お世話になっている手話サークルメンバーたちへ心をこめて手造り食べ物をあげたり、自分の家族も大事していた。聾おばさんは長い間で生きてきたのも、見えなくても温かい人間味があったでしょう。聾おばさんが語った内容はちゃんと伝える意味があって、私としては大驚きで、きっと活在能力を開けたのは、手話のおかげだろう。ちゃんと聾学校に学んだ聾者でも、手話を身につけたとしても、手話を伝える意味が全く差がありすぎる！遅くても手話に出会った聾おばさんのような存在は不思議で全国にも居るかもしれない。そう、實在に居たが、ほとんどは聾女性ですよ。やはり、無学でも手話の意味を分り合えた聾者なら、もともと能力があったでしょう。聾おばさんは今、65歳になったと思いますよ。

司会 やっぱり、聾者同士や初めて聾者だった相手を知った時は、手話の始まり、続きは聾者というアイデンティティも同感から生まれますね。年齢が関係なく、聾のパワーは不思議ですね。質問したい方がいますか？

庭田 ちょっと聞きたいことがあります。聾年配の方々、当然でちゃんと自分が戸籍に入っているとします。実は、先にて話したように、私のおばあさんの妹の旦那さんは聾者だが、なんと結婚する時、戸籍がないだと、初めて知って騒いでたです。つまり、生まれた時から、戸籍申請せず、隠したまま学校も行ってないようだが、手話を身につけるのも、まあまあだし、ハンサムだった。「戸籍は何？」と意味が分らず、お互いに結婚したくて、戸籍がないと進まなくなってしまうから、裁判所に持ちかけたら、やっと戸籍申請許可がおり、結婚出来たという話を聞いたです。このような例外はあるでしょうか？

伊藤 今は広島にあった話ですが、実は、「戸籍無という聾者」については、聞いた範囲では、意外と全国にも数人も居ます。生まれた子供は聾者だと知り、未来は無い子と同様に戸籍申請が必要と思ってなかったから、そのまま育てた。ある日で聾者が病死したら、医師が診断書を通して死亡書届けも証明が必要になる。だから戸籍無という以上で、問題解決の為に家庭裁判所へ手続きしてこうなります。しかし、聾者自身は「名無し子、家無し子」ということになりますが、この話は30年以上前ですが、現在は法律の上に生まれた子はどんなにあっても、戸籍申請する原則となっています。密かに生まれて隠しても、厳罰とみなされる。又は死産でも逮捕される。今は国民が国の法律に従う100%にならないといけません。

庭田 わかりました。知りたいのは、昔で田舎の場合は生まれた子供が聾者だと、知れ渡したくない両親としては、隠すだけで分るけど、なぜ、戸籍申請が無いままだと…。常識には考えられない。成長になった聾者は戸籍が知らないままで生きてきたとは、あんまりだと思う。あの時代は事情があったと思うけど、同じ例を知りたかったです。

伊藤 戦後昭和22年、憲法改正で民主主義になったので、法律も国民が守るだと指示がありました。戦前なら、住んでいる山奥が生まれた子は目がまともない為、土の中に埋めた。役場も知らず、本人に問う責任もない。しかし、未婚女性が身ごもってしまった場合は明治・大正時代は役場まで行くのに、交通面が不便でやむを得ず、次々と生んだ子が成長になったという事実は多くあります。それを知った役場関係者はいけないと思って、電話設置し、回線も多く付けたり、方法を変えて発展したおかげで、戸籍申請数が増えたそうです。

司会 人権問題が関わりますね。生まれた子の聾者は人間以下と同様と思ってたとか、将来も考えてなかったでしょうね。成長になった聾者自身も、「自分の戸籍がない?!」と知った時でも、怒るか、怒らないか、気持ちから起こらないと、分らないですね。あ、皆からの意見を聞いてみて、思い出しました。皆に配ってある資料の中に、聾女性である未婚として、こんな話題に載せた事件については、考えられないことを知りたいことがあります。昭和27年2月島根県の田舎に居た若い聾女性は家族と会話がなく、孤独な毎日だった。聾女性は小さい時、お父さんに可愛がれたが、亡くなり、成長になった頃は、家庭が生活苦になり、畑に稼いで繰返し毎日に嫌な思いさせられて、洋裁に憧れていた。聾女性の兄嫁が来てからますますいじめられて、前より農業仕事の負担が重くなり、苦しめられた。

ある日、聾協会、聾学校同級生会とか、家に来て「同じ聾仲間たちが集まるから、来て下さい」と誘われてくれて、行きたがっている聾女性の気持ちを踏み込んだ兄嫁が「ふん、行く必要はない!」と言われて、泣く泣く聾女性に分ってもらえなかった。それでも、聾女性はあきらめず、念願する洋裁に入れる所だったが、家族が大反対されて、結局は聾女性が自殺した。それは実話です。この聾女性の苦しみを分ってもらえるよう、投稿したのは、今、いらっしゃる藤田孝子さんが書いて下さったです。少しでも聞いて頂けますか? 聾女性は23歳位に若さで去ったが、この事件を全国の若い聾女性たちに反応されたか、どのように影響を与えたか、知りたいです。

藤田 終戦後になった頃から昭和28年頃までには、聾女性が社会に出るわけないという理解出来ない時期でした。特に田舎に暮らしている聾女性は表に出さないから、苦しんで終りたい方法は自殺しかないのだと知っていたから、こうなったでしょう。聾者同士で交流を認めない面がありました。私もそうだった。京都府立盲啞学校にて仲間達と楽しく過ごしたので、卒業してから田舎へ帰ったら、聾者は私だけでわびしいだった。終戦後、何かの集まりお知らせがあって、参

加しようと思ったが、お母さんは「1人だけで京都へ行くなんて危ないから、あかんわ」と止められたけど、手紙をくれた友人が「孝子さん、会いたいです」というのをどうしても、会いたくて、お母さんをはね返して1人だけで京都市へ行って皆と楽しく語り合えました。

そう、その頃は、聾女性が1人だけで出かけるなんていけないし、一人旅も一人行動も禁じられたようだった。今みたいに、集まりがあって簡単に出かけるわけにはいかない。先にて話してあったように自殺を選んだ聾女性の場合は、胸に膨らませているのに、家族からは「よい」と一度も言われたことがないし、いつまでも抑えられて…。「私なんか、聾者だから居ない方がいいでは…私が居ても役に立たない。生きてても楽しいことも無い。いっそ、死んだ方がいい」と限界を感じてこれ以上で生きていける気持ちが下がってしまい、自殺してしまったでしょう。

そのような全国も同じ例外があります。私も若い頃は「死にたい」と思うことがありましたが、先に死ぬと、お母さんに迷惑をかけてしまうから、「我慢して頑張らなきゃ！」と励んでここまでに来ました。「聾者イコール自殺だと、同じ聾者に知らされると、かえってマイナス面になってしまうからいけませんね。自殺した聾女性は、同じ聾者に会いたくて気持ちが何倍も叶いたいの、家族達は「聾者なんて人間以下並で下衆！」と思い込んで聾女性の動きを許せなかった。もし、早く私が聾女性に話し合えたら、なんとかやれたと思うけど残念と思います。

数年後で「第一回全国ろうあ婦人大会」京都開催に参加した時、全国から聾女性の姿が沢山で来しました。当時で婦人部長は故湯浅さんでしたので、私の後輩でした。学校時代はとても優等生で私も期待に応じて「聾女性としては、くじけてあかんわ」と助言しました。数年後でろう婦人活動にあたって、湯浅さんは「聾女性姿が頑張らなきゃ」と姿を見て嬉しかったでした。そう、同じ聾女性である後輩に「聾女性是这样ならないとダメ！強くならなきゃ」と助言するのも、先輩という私の役目であり、又は聾男性から「そこまで言う必要は何や？生意気やわ」と言われたけど、無視しましたね。しかし、うちの主人の顔を立てる理由あって、私は影に居て聾女性たちに助言したり、役に立てたのも良かったと思います。主人が講演の為に一緒に行った時、誤解されたことがありました。主人は発音が上手だから、「奥さんも上手でしょう」と言われた時、腹が立って「失礼わ！」と思ったことがありました。どのように質問されたことを主人が分ってあげるように、「孝子さんは声を出せるけど、発音は上手ではないですよ」と回答したが、「孝子、ここに来なさい」と言われても気が小さかった私は何度も首を振った。主人は「孝子、遠慮すると、損にするぞ」と言われ、しかたがなく演壇に立って手話と共に声を出したら、聴者たちが納得したようでした。

藤田家族として初めて独立したのは、主人が鳥根県の浜田ろう学校に赴任してからでした。その時、長女が今までと違って、のびのびでこの生活を望んでいました。なぜかと言うと、主人が鳥根に居る前に京都で実家にて兄嫁子供たち、義母、私の家族も含めて、大家族の中に「聾のお母さんは大変ですやわ」とぶつぶつ、何度も聞いた長女が肩狭いようなつらい思いさせられてしまったです。次女はまだ小さかったので、何も感じなかったでした。ある日、長女は、夕食のご馳走は魚焼きなので、義理兄、主人は男として一匹、あと女性は魚半分であるのをじっと見ていたし、お風呂も最後に入るのは弟嫁である私だったので、湯の量はわずかだった。おまけに、大家族の最後としては、アカたらっけで、やむを得ず入りました。それだけではなく、おばあちゃんは孫達にまんじゅうを男の子の場合は1個、女の子の場合は半分でわけてもらった長女は文句を言えず、我慢出来たけど、次女は気が付いて、腹が立って半分でわけたまんじゅうを廊下に投げたのを見て慌てて、半まんじゅうをきれいに拭いてあげたら、食べれました。

買物も兄嫁に任せた形だったし、台所も立つのが許されなかった。最初、刺身の切り方でやらせてくれたけど、兄嫁から見れば上手くなかったので、何回も練習すれば、上手くなると思ったけど、結局は一回だけでした。大家族の中に見えない差別生活されて悔しい思いだったので、鳥

根へ移ってから貧乏生活でも、買物出来たり、料理をやったり、娘達も楽しい日々になれた。4年間も暮らした夫の実家は二度で戻る気がないので、浜田に生活出来たのは、家族にとっては生かしたと思います。

「このようにならないよう、不安はあるけど、自立した方が自分達の為になる」と若い夫婦に助言してきました。両親からも、主人の家族からも、私に「声を出せないし、発音も上手くないので、無理だから聾女性は出来るわけない」と言われたのは、一番で悔しかった。

聾家族という強い姿を見せたのは、やはり手話通訳が居れたおかげで、昭和40年からです。家族が居ながらも、手話通訳を目指した聴者女性も心強かったと言えます。主人と子供達が理解してくれればいいけど、主人のお義母さんが反対されたら辞めるか、密かに手話を学んだり、聾者の為にやって下さることはありがたい気持ちです。今も何か行事とか、車の送迎も付き合っています。手話通訳者は日曜日でも、家族が居ても通訳仕事あることを私としては、通訳者の子供に申し分けなく思っ、お詫びFAX送信したことも気を配っています。そういう立場でお互いに考えないといけませんね。

司会 すみませんが、確認したいことがあります。自殺した聾女性は聾学校に学んだことがありますか？又は、手話も出来るとか、日本語も書けるのでしょうか？

藤田 聾学校に行っていました。手話は少しで出来たけど、ほとんどは、口話方式(口話普及時代)の為に、口話中心でした。日本語を書けるのは低かったです。自分の聾であることも自信がなくて、これ以上に生きていけないから自殺を選んでしまったようです。そういう時代は聾男性と聾女性が比較すると、聾女性の方が日本語を書けない率が多いです。聾男性は話せないけど、日本語を書けるほどで得意な部分が居りました。日本語を書けるなら難聴女性の方が上だと、認めているレベルの時代でした。「孝子さん、文を書けるの？珍しい」と言われて「失礼だわ！私だって本を読むのが好きで文を書いているもん」と言い返した。やはり、口話方式教育時代のせいで、視野がせまくなってしまふ聾者になってしまいます。

だから私は聾男性と手話でおしゃべりするの楽しいのは、その原因だったからです。私は手話を覚え始めたのは、中学5年からで、私の同級生7人も居て、聾先輩が「君らは口話だけで受けたね？まあ、手話はこうだ」とゆっくり口を動かして手話も同時に教えて頂きました。「あれ？手話はきれいで…」と見惚れた位で「聾先輩たちの苦労を背向いてはいけない」という聾である歴史を語って頂いてから、関心を持つようになったきっかけでした。聾先輩が「聾学校の先生たちは聾生徒に素晴らしい技術を持つだけ良いだと、考え方も教え方も間違いと思う。頭はどうでもいいみたいとは、あかん」と言われて私の周りを見ると、やっぱり、ほとんどは難聴者が日本語を書けるので心底から悔しいだった。聾学校でちゃんと、日本語の文章を教えないと絶対にあかんですわ。そう、口話中心で習った時間は大きな無駄で無念です。

伊藤 皆から、聾者が日本語の文章レベルは弱いだろうと言われてたけど、私としては疑問視があります。聾者の周りから影響でこうなるでしょう。学校だけではなく、家族の間もあります。例えば、近所との挨拶とか、失礼の無いようにお行儀よく、「動くな！話すな！歩くな！」というように覚えてしまった聾者が人と目を合わせるほどで、見えない所に身につけてしまったでしょう。皆もどのように経験があると思います。聴者が話し合ってる間に「何を話し合ってる？」と不満たらっけに溜まったのを、どうやってスッキリしたらいいか？と余計に顔を出しますね。もし、お母さんが手話をしかけたら、間違いなく、聾児は笑顔も見せて、会話も出来て、心がスッキリして、頭の知恵を発達して行けるでしょう。不満で溜まった量があるからこそ、頭の知恵が上達にならない。その原因は聴者たちが知らないから、誤解面がありますね。

司会 おおお、昼時間にせまってきました！午前中に話し合った内容を見ますと、「聾・女性という二重差別を乗り越えるにも、耐える気持ちから誇りを持てるまでに時代の流れになっているけど、実際には、差別が終らない。まず、聾女性歴史を知るには、やはり、身近な地元である聾女性年配から語って頂けるのが一番でよいことです。先にて話した豊田さんがいつも、聾女性年配たちに囲まれている間で、その時にデータ作成する必要ですよ！庭田さんも、広島聾女性年配に関するデータを作れば、間違いなく多いだと思ふ。「聾である母として、周囲から冷たい目で見られ、子育て、生涯するまで乗り越えた」「自分が聾という自覚は無く、農業に働き続けて初めて手話を覚えた」というような明暗人生を語るとは、生き方もすごいです。藤田さんが話したように「自分の家族、そして主人の家族、そして自分の家族」という3つの苦い経験を味わっても、自分の生き方を持っているからこそ、ここまでにあちこちで歩き回ったのも、私達から見れば、素晴らしい聾女性としてのいい手本になるでしょうなあ。

高橋さんたちも聾女性の人生に乗り越えたのを、若い聾女性たちからも見て、成功も失敗も関係がなく、参考になるでしょう。うむ、私が今までに見ると、聾歴史全体には、聾女性の方が表を語れないような深いです。聾男性はろう活動だって当然ですよ。家庭は妻に任せているし、もし1人だけの身だったら、何も出来ないでしょう。昔、聾女性は1人だけ生きられないのですが、現在ような仕事を持てたら、又、聾女性歴史が変わりますね。

司会 午後からのタイムに入りました。午前中は哀しい聾女性史を語って頂きましたが、午後からは、2つという聾女性に関する明るい話題、珍話内容を資料から話します。

皆さんに配った資料の中に載せてあるけど、ちょっと、新聞に載せた記事を読むだけで間際らしいけど、昭和26年、長野県の聾女性が人生の中に狂わせてしまい、頭が混乱してて、警察のピストルを盗んで、痛い目に遭わされた恨みのある聴者男性を撃ち殺すつもりだが、警察が見つかり、止められた。その事件発生したのを世間に知らされ、「聾女性は弱さで甘く見るじゃないか」と震え上がった。

そう、聾女性は当時で22歳だが、聾学校へ行かず、無学だったので、まともな手話が出来ず、身振りで通じる位だけど、周囲の様子を読み取れて、行動は反応神経はバグンで眼も鋭いだった。ピストルを盗んだ聾女性を捕まえて、警察署で尋問したが、全く通じなかった。それとも警察は疑って聾女性に聴力検査等調べたが、最終的には妊娠しているか、なぜかと、聾女性は「男遊び」噂が耳に入ったので、そこまで調査した。調査時間がかかったり、会話不十分だと、警察の方がお手上げしたそうで、その時は手話通訳が居なかったからね。

それを聞いた信州大学の心理学教授が聾女性に目が止まり、「きっと、聾女性はどんな心療出来る方法があるだろうか？」と研究目的らしくて、時がすぎても、結果が出なかった。聾女性の生い立ちを見ると、小さい時から、特徴な身振りで特にお父さんだけで、聾娘の気持ちが分るように、身振りを読み取れて感じたそうです。聾女性は農家の下に農業を手伝ったが、退屈で家出し、お正月頃で家に戻った時、家出した間の経過をお父さんに身振りで語ってお父さんはよく見ていた。聾女性が「家出した後、街で見知らない男に犯されてしまったことを恨んでその顔を覚えた」のこと。お父さんに告げた翌日、警察のピストルを奪って男に撃ってやるということだった。

この経過をよく知っているのは、聾女性とお父さんしかない。だから聾娘の話しが分るのは、お父さんだけなので、この経過を通訳してあげたが、警察は信じてくれなかったのは、「そうはいかない！お父さんはウソついて聾娘をかばう気だろう？」のことだった。お父さんからの話によると、聾娘は家に居て畑を働く時は普段でおとなしい性格だった。いきなりに行動したとは、なぜか、理解し難いでした。しかも、聾娘は畑仕事の量はお父さんより2倍も重い物を背負っても平気で道にはぐれた他人から「アッパ！アッパ！」とバカにされて、ただじゃおかないので、ぶ

ち殴って、相手は男女でも関係がなく、自己保守したようです。しかし、この事件は最終的にどうなったか、結果は分らないままで気になっています。きっと、聾女性は今頃で70代でしょう。この事件に関することは知っている方が居りますか？

うん、よく調べてみると、なぜか、昭和26年は、聾女性が次々と事件発生した年が目立っていました。又、北海道に居た聾女性も警察を騙した問題がありました。聾女性は持ち金がなく、方法を考えて警察署に伺って「すみませんが、私は聾者です。お金がありません。家も食べ物もありません」とすがりついたら、警察は「よしよし」とご馳走して頂いた。警察が「帰る家は無いか？私の知り合いである近くの美容院に住み込みして掃除、洗濯やったらどうか？」と案内してくれた。もう1ヶ月後に過ぎて美容院店長が真面目に働いている聾女性に気に入って可愛がっていた。しかし、すき間に聾女性は美容院店のレジ金庫から現金を奪って「あばよ」と出た。その時、警察があまりにも、ショックで信じられなくて「聾女性に甘く見るじゃなかった。警察という義務は、障害者に親切してあげるように正義を果たして守ってあげようと思っていた。騙されたとは、警察がガクリと下を向けた。

次は九州である事件発生したのは、聾女性がスリ集団のボスである上でベテラン！聾女性は福岡出身なので、福岡-大阪-東京という線路につながるルートでスリ集団に指示を働いたが、東京で捕まえられた時、「はい、私です」と微笑んでいた。

うむ、昭和26年、1年間だけでなぜ、聾女性が社会に背向けた行為をやったのか？又、同じような事件が無かったし、再びで哀しい聾女性話題になったそうです。昭和26年というのは、何を起こさせたのか、偶然だと、不思議ですね。今、昭和26年の事件を取り上げたのは、3件ですが、もしかしたら、他もあったかもしれませんね。

伊藤 今、細川さんが話してあったように、福岡で起こった聾女性がスリ集団に関わった事件は聾女性はボスであり、たった女性は1人だけ！下っばらは男性のみだが、このスリ集団は組織的で多数も居った。男性は戦後で仕事口が見つからず、クビされ、困っているのを見て、聾女性ボスは食べるに生きるために「東京へ行くのよ」と汽車に乗った。目的地に降りる前に「いい？前に言った通りでやるのよ！東京の乗り換え線路はいくつもあるから、上手く盗む方法を生かすように、私から目の合図する始まりからやりなさい！」と指示して行動は別々して降りて、さりげなく盗んだ。これで成功し、聾女性は「又、同じ所でやると、バレるから大阪に発つよ！」と集団も一緒に発った。大阪内のある駅で人が混んでいる様子を見て「いいわね！行動は1人だけでダメよ！3人組で行け」と見事に指示した。3人組が要る理由はある。もし、1人だけで行くと、身の中にある財布が見つかれると、バレます！だから、一番前の人が財布を盗んで、ひっそりに仲間であるスリ集団が要る後ろへ又、最後の人へ財布を回します。盗まれた人が一番前の人に指して、警察が身の回りを調べて見当たらなかった。なんと、見事に回した頭脳行動した聾女性でしょうね。

前に講演で福岡へ行った時、「スリ集団を働いた聾女性は知っていますか？」と問いかけて見たら、「はい、知っています。頭が良くて美人でした」のこと。しかし、会える機会がなくて…。今も思い出すと、会ってみたい女性です。もし、この場に居たら、絶対に拍手してあげたい位。盗むのは罪であるけど、聾女性としては、見事な作戦方法の部分を見返した世間を立ち上がっただろうね。大阪、名古屋、東京の駅に線路の関わりで聾女性の組織集団が居たから、それを追っている刑事姿が居ました。聾女性が気配を感じて下っばらに「デカがいるわ。よくデカの顔を覚えるのよ！万一で車内にて盗んだ後、デカが来るから顔をよく見て！ワシ鼻デカ、団子鼻デカの顔を覚えて、車内に入ったら、デカ姿を確認しなさい。もし居たら、上手く次の駅に降りるとか、盗まないように！」と指示した通りで、下っばらは、デカが居るのを見て、又はデカも下っばの

顔を見られた時、上手く車内に入ろうとドアが閉る前にホームへ戻ったり、次の汽車に乗るのを待つことになる。デカが居ないのを確信したら、聾女性ボスが合図して、ハデに盗みます。もう刑事が聾女性の顔を知り、本格的な動きが始めた。この集団の行動を見て、いちいち電話で報告して、集団は切符買ったのは、東京行きだった。

あの頃は、今みたいな自動切符販売機がなかったので、窓口申し込む方法なのでした。集団は15名位居て、全員も東京行きキップ購入したのを知った刑事が追って、すぐ東京へ電話連絡した。東京到着時間も確認してあるから、東京駅に居る刑事姿が現した。車内に居て下っばらは「東京へ行くんだね」と言って、うなずいた聾女性ボスが何となく感づいて、たまたま昼時間で駅に止まった時、「降りるわよ！」と下っばらも付いて降りた。そこで休憩後、変更して電車内でハデに盗み回した。それで、何も知らずに居た刑事が乗った汽車が到着したのを目を光らせて人、人…結局は居なかった。待つ時間を食われて騙された刑事が衝撃が大きかった。だからこんなことをしたとは、想像するだけで、私も思わず「よくやれたな！」と褒めたい位で実際に会ったら、惚れるかもしれないね??(会場内爆笑)あ、数えてみると、現在なら約78歳位でしょう。私が当時、聾女性スリ集団事件発生後で知ったのは、週刊雑誌を読んだ時だった。

刑事が聾女性スリ集団を捕まえる為に、大阪に刑事は多数も監視しており、東京も刑事が多数に置いた。大阪と東京の刑事らも、何回も電話確認しながらも捕まえ損なった時、悔やんでいた。聾女性ボスは「いいかい？皆もホーム内、車内も絶対に手話を使わないように、合図は1回だけで出すから」と従っていた通りで、下っばらは雑誌を読んだり、座ったままで上手く聴者と同じように動作した。刑事たちは「絶対に手話を見れば目印ですぐ捕まえられる！」と自信たっぷり待ちかけたので、聾女性ボスも作戦した通りで通れた。

東京駅内は刑事が何人も監視したが、手話の光景は一度も見かけなくて待ちくたびれていた。聾女性スリ集団は別の行動で、繁華街へ行って「いいわね？そこへ行きなよ」と指示したら、上手くやれた。時間が過ぎたら、加害者が多数で交番へ届けた時、警察が疑問して、刑事と連絡し合ったら「やられた！」と目を呟いた。加害者が「そう、身振りで見かけたわ！」と訴えていた。

聾女性スリ集団は絶好調に終えて福岡に戻った時、いつもの刑事が付いてきたのを見て聾女性は前より、警戒心を深まって「下っばが1人で捕まえられたら、全員も逮捕されるから、見逃がさない！」と時間が過ぎると、捕まえられた日に役目が終わったのであった。なんと、新聞の記事は目立って載っていたので、刑事らは汗の苦労で掴んだようだった。それを知った世間の反応はまちまちだが、衝撃が大きく、同じ聾者としては、思わず拍手してしまったでした。それは事実ですよ！

司会 凄くハラハラした場面を想像するだけで…もし、実話から映画を作ったら、見た客達がどういう反応が出るだろうか？

伊藤 いいけど、聾女性のイメージを悪くしたらマイナス面になってしまうからね。

司会 そうですが…。ちょっと、聞きたいことがあります。世界第二大戦から昭和20年8月15日終戦まで、聾者同士が会えず、戦後でやっと再会出来た時、「生きていたの！良かった！あの人はどこへ行ったの？」と久しぶりに聾者同士が話し合っ、改めて各地聾啞あ協会、ろうあ倶楽部が活動再開し、なぜか、「聾啞女性ミス・コンテスト」が話題になり、全国中も流行っていた。しかし、「聾啞女性ミス・コンテスト」選出した基準は水着を着てたのか？綺麗なドレスのままか？

伊藤 いえ、水着出番がありません。ドレス、着物もですね。

司会 あらら、そうですが…。「聾啞女性ミス・コンテスト」は大ブームに走ったようだが、その前にきっかけは何でしたか、知りたいです。皆も知りたいですね！

伊藤 この流行に火をつけたのは、昭和21年から「日本女性ミス・コンテスト大会」から始まって女性肉体美のプロポーションに男性の目が熱くて無我無中だった。終戦までの間は、戦争に耐えてひもじいして惨めに味わって苦しんでいたから、美しいプロポーションした女性を見るだけで気持ちが明るみ出て、興奮気味で久しぶりに解放された気分だった。そういう解放された一瞬を騒いだのは、日本中も同じく盛り上がっていた。優勝、準優勝、3位という審査員まで楽しみの1つと言えたでしょう。だから、「聾啞女性ミス・コンテスト」まで持ちかけて、最初に開催した地は京都から始まった。その大会の中で企画を入れて実行した。審査員は藤本連盟長、大崎さん、大家さんも居て、出場したろう女性に投票して結果は、「河合さん」という方が最初の聾啞ミス女王となった。会場内は熱心に伝わり、表彰し、その後で選ばれた聾啞ミス女性は次々と求婚されておめでたいとなった。なんと、最初の聾啞ミス女王は河合さんから湯浅さんが最初の全日本聾啞連盟婦人部長になられた方ですよ！湯浅さんは数年前でお亡くなりになりましたが、もう過ぎた話ですね。

豊田 質問だけど、当時で「聾啞女性ミス・コンテスト」の審査員を務めた方は全員で聾者ですか？

伊藤 そう、全員は聾者、男性陣のみ！

豊田 へえ、男性陣のみなの？なぜ？

藤田 そう、審査員らは目の保養で遊び気分半分を楽しめたからね！

豊田 そうなの、遊び気分半分で開催したとは考えられないことですね。あ、記念写真とか、ありますよね？

伊藤 日本聴力障害新聞縮刷本なら、載せてありますので、見て下さい。

司会 なはっは、豊田さんも若い女性も同じ感覚、関心がありますね！ちょっと、詳しく知りたいけど、「聾啞女性ミス・コンテスト」に出場した聾啞女性たちは、舞台上で立ったまま？それとも、おじきして終る？何か、手話で語る出番はありましたか？例えば「わたくしは東京から参りました。名前は〇〇と申します」と手話で語ったとか、何も言わないで美しい姿勢で立ったままなのか？そのことをかなり、興味がありますわ！

伊藤 昭和23年4月頃で、私はまだ高校生頃で新聞に載せた記事「聾啞女性ミス・コンテスト」という部分を読んで知っただけでした。まだ学生的身で見に行けるわけないだよね。

藤田 私が見たのは、出場した聾啞女性は舞台上に立って身振りは無かった。ドレスより着物姿が多くて、歩いて立ち止って客席に向って微笑んでいただけでした。もちろん、私から見れば、審査員の目はデタラメっぽいでアカンわ！出場した人数は8～10名位でしたね。うふふふ、なにし



ろ、私の主人も審査員でしたので、疑っていましたよ。この催しは、全国聾啞者大会期間中で行いましたね。余計なことでしょうね？

伊藤 全国大会だけではなく、各地聾啞協会も流行っていたよ。東京も横浜も地元聾啞協会主催で「聾啞ミス横浜」「聾啞ミス東京」も取り上げていた。だから全国聾啞大会の「聾啞女性ミス・コンテスト」催しという目玉に釘付けされた聾啞男性たちも熱が高まっていた。

藤田 ふうん、理解できない面があったけどね。

豊田 あの、賞状だけではなく、賞品も内容は何だったかな？

伊藤 うむ、詳しいことは知りませんが、日本聴力障害新聞縮刷本の1巻を読んでみれば、分りますよ！購入しなさいよ。

藤田 そう、あの頃は、聾啞男性が聾啞ミスになった女性に夢中して、求婚まで争ったり、美人しか見ないようだったね。

司会 なはっは、裏話を聞けて面白いね！再現だったら、見たいね。

本田 すみませんが暗い話に戻りますけど、前に宮城聾史集いで戦争体験を語った聾女性姿が多かったの、質問しようと時間切れで終わってしまった。だから、ちょうど、この場で質問したいです。戦争中で食べ物配給(醤油、砂糖、米等)は整理券制だった頃で、聾啞夫婦はどうやって対応出来たか、情報はどこから入ってきたか、隣家から教えて頂いたか、知りたいです。

伊藤 戦争中は全て、軍人に優先していたので、国民は対等的で量を計り、「節約を！」スローガンを取り上げて守ります。村から米を区役所に届き、町内会が住民調査して各家族人数の量を決めて帳簿に記入し、配ります。それを従っていた国民が耐えていたが、この配給は無料じゃなく、有料で購入します。もっと米を食いたくて、こっそりの村へ買い求めると檻に入れられ、3ヶ月間もここで過ごします。米にねらって情報を入り、行動したのは、ほとんどは聴者の方なので、聾者は居なかった。ヤミで売っていた米は真っ白でつやつや、沸いた匂いもよくても、配給米より4倍も高く売られていたが、農業側は生活苦で、ヤミ売りの方が金儲けで政治にばれないように、密かで協力し合った。夜でヤミに通して、米を高く売れた現金を手にいれた農業側が高笑いが止まらなかった。

司会 ちょっと、質問した内容は違いますよ。質問したい内容は、聾啞夫婦の場合でどうやって配給券を行列に並ぶ前にどこから情報が入りますか？ラッパで吹いたら、聴いた聴者が駆けつけて並んでいるけど、聾啞夫婦は何も知らないだとどうしますか？

伊藤 はいはい、もちろん、戦時中は対等に国民一人残らず、地区町内会で隣組(現在は回覧版のこと)を廻ってきましたよ。聾啞夫婦のお宅が留守の場合は、玄関前に隣組帳を置きます。後になって聾啞夫婦が目を通して判子を押してから、続きで隣家に持って行きます。だから回覧版あるから、聾啞夫婦は情報を得ます。又は、隣家から助けられたり、親類が駆け寄って来て説明して頂いたそうで、特に不安はなかったようでした。戦争中は「日本が勝つために」と近所の付き合いは絆が深く、大事にしましたよ。

司会 続いてこの中に戦争体験した方がいらっしゃると思います。私は今までに、広島聾女性が被爆者自身が演台に立って講演を見たことがないです。個人的で家に訪問して話を聞いたことがありますけど、ほとんどは、被爆者体験を語ったのは、聾男性たちを見たことがあります。被爆者聾女性が講演があったのでしょうか？

庭田 あらっら、ちょっと、ここの場を借りて宣伝していただきます！来年の日本聾史学会は広島市開催しますので、ぜひ、参加して下さいね。被爆者聾女性が体験を聞いたことがあるのは、当時で主人は大阪に残り、聾女性は実家である広島市へ帰り、二人の子供と一緒に生活して8月6日、原爆投下された時は、聾女性が家の中に無事だった。しかし、子供二人は出かけたままで…。慌てて姿を捜し回ったが、もうすでに亡くなった。聾女性はあまりにも、大きな衝撃を受け、心配で駆け寄って来た主人が落ち着いてから「大阪へ戻そう」と言ったが、聾女性は首を振った。「私だけで生きるなんて。亡くなった子供がここにいるから、離したくない」と決心して離縁を申し込んだ。時が過ぎても、この話を聞くだけで悲しいことです。この聾女性は藤枝さんという方です。「あの時、子供たちが出かけるのを止めば…もう少しで時間をズレたら…母親としては責任です。何年も過ぎても、子供たちを忘れるわけにはいかない」と聞いた時、心の痛みで伝わって鳥肌がしました。ビデオ記録保存してありますので、来年にビデオを見て下さればお待ちしております。

藤田 今のは、事実です。聾女性の主人(大家さん)は、私夫婦と友達でした。そういう話を聞いたことがありますけど、戦後ではなく、数十年後で落ち着いた頃、私の娘が大火傷した時、「こんな娘にしたのは、母親である私のせい」と苦しんだ時期で原爆に子供を失った大家さんからこのように言いました。「妻は広島出身だった。戦時中は大阪空襲が激しくなって妻は‘広島へ帰りたい’と言われて‘あかん！広島は軍隊港のも目印だから、起こされるから’と言ったが、妻は難聴者で賢明な方で‘広島は安全！大阪は何度も空襲されているから、危険！’と分かり合えて、まだ小さい子供2人を連れて広島へ帰った。(あ、先にて話した内容はちょっと違いますけど…)ある8月6日、藤枝さんと子供2人も一緒に電車に乗ろう時、思い出して「忘れ物があるから、戻るので、ここに待ちなさい」と言って子供2人を置いた。なんと、数分後で原爆投下された中心地は子供2人がいる場だった。

藤枝さんは慌てて駆け寄ったが、もう子供2人姿も街も黒こげた。大阪にいる大家さんがすぐ、広島へ駆け寄りたいだが、原爆の第二感染恐れがあるので、数日後で駆け寄った時、たまらない臭いは今も忘れられないそうです。子供2人を失ってしまった大きな衝撃された藤枝さんは泣き止まらないでした。大家さんも悲しんで慰めて「大阪へ帰ろう」と言ったが、藤枝さんは息子の姿を頭から離れず、「広島に残る」と…。結局は離縁しました。

大家さんは何回も藤枝さんに納得したけど、理解は出来なかった。だから心を痛んで仏壇に亡くなった息子2人の遺影を置く気はなかったそうでした。数年後で、やっと仏壇に息子2人の遺影を飾ったのを見て、とても可愛らしいでした。「息子たちは腕白なイタズラ好きだったね」と微笑んでいたのを見てなんとなく、安心しましたね。やはり、原爆体験者は人の痛みは分かり合えるように、立場を考えなくてははいけませんね。又、私の娘に大火傷した話が出ると、「それは聾両親のせいでしょう」と世間に言われて心が痛みました。しかし、明るい娘のおかげで色んなことを教わったように、私が娘を産んで良かったと思っております。大家さんはもっとも淋しい方でした。

司会 聾女性だけではなく、聾主人も苦しい体験を味わったのも戦争というのは、痛み、苦しみ、

つらい時期だったと思います。聞きたいことがあります。聾女性が戦時下は苦しんだが、終戦後、解放されて「明日があるわ！食べて生きていかなきゃ！」と早くも立ち上がったので、洋裁、出来る仕事を探すと、たくましい精神でした。敵国だった米軍が日本に来て、日本国民は怖がっていたが、女性の場合はいい商売出来た。だから聾女性もこんな生き方を変えてくれたでしょう。聾男性は靴磨き仕事に励んで、米軍に身振り会話が出来ていい評判だった。聾女性も居たかしら？(参加者たちから「居たよ！」)

それだけではなく、パンパンもやったよね。だから聾女性は体を売っても、生きるために勇気が要るだと、分かるような気がします。

伊藤 東京の場合は終戦後で、すぐ9月から靴磨きを始めた。実は、仕事を探してもなかった。横浜、上野、銀座等、聾連中が靴磨きに儲かって汗を流して働いていた。その時、私はまだ中学2年生で噂が入って「靴磨きをやっている聾啞者がいると聞いたので、見に行こうか？」と友人と一緒に行って見たら、何人も手話している光景を見て驚いた。聾啞者たちの顔は知れず、15歳上だったらしい。その時、私は見てしまった光景は今でも頭に焼き付いてもう50年前なのに、思い出すと、はっきりに覚えている。

数年後で聾啞者は仕事口を見つけ、次々と靴磨きは減ったが、たった一人だけの聾男性が30年以上いや、50年間以上も働き続けたが、2年前で亡くなった。靴磨き人生に賭けた聾男性が50年間も一筋に働いたとは…。真似に出来ない話ですね。

司会 あ、思い出したので、戦前、戦後も来日した米国のヘレン・ケラー女史を見たとか、会ったことも居りますか？三重苦に乗り越えたヘレン女史を見た印象が忘れられないとか…会った人がいますか？

(参加者たちから「見た！会えた！」) おお、意外と多いですね！聞きたいです。

細川 戦後、昭和23年9月12日かな…。仙台にいらした時でヘレン女史と通訳者のトム先生も同行でした。ヘレン女史は優雅なイメージで笑顔も絶えなくて握手した時、手は触れ心地がよくて忘れられないです。当時は宮城県立盲啞学校で花束を贈る代表は2人で盲女学生と聾女学生だった私でした。

ヘレン女史は私の頬に感謝のキスされ、瞳は青くてまるで人形のように綺麗でした。体格は大柄なので、抱き心地も感動しました。

豊田 質問があります！ヘレン女史と話し合えたでしょうか？

細川 いいえ、私は米国手話が分かりません。トム先生が通訳したので(トム先生が話した頬と口にヘレン女史が手と指に押さえて読み取りしたり、手話触通訳したり、このような方法でした)。

伊藤 説明します。ヘレン女史は生まれつきで見えない、聞こえない、きけないから、聾者と同じ手話だと、コミュニケーションは出来ませんよ。だから、特徴的な通訳を伝えるように生かした方法をもたらししたのは、触手話方法、相手の口話を読み取るために頬に触れたり、花の色、匂いも、敏感な部分を伝えなくてははいけません。聾者と盲聾者は全く通用できないですよ。

司会 もう時間になったけど、気が付きました、皆に配った資料の中に「日本文学」の本から聾女

性に関する部分を取ったけど、この物語は架空です。作り話でも、なぜか聾女性の出番があったのか？平安時代、古事記という物語に載っていますが、読めない文章表現が多く、解釈できないので、すみません。「今昔物語」もわかりにくいけど、最終場面は出版した本が違ってきます。

- 一、あるお婆さんが捨てた子を引き取って育てていたが、大きくなった女兒はツンボでも、可愛がっていた。
- 二、あるお婆さんが捨てた子を引き取ってツンボを知り、密かに殺した。
- 三、あるお婆さんが捨てた子を引き取ってツンボだと知り、どっかに捨てたという物語が異なっています。

「オカシ」という聾つんぼ女性は日光に女中として暮らしていた。この村で新しい寺院を建てるために、生身である若い娘が寺院の柱に生きたまま、縄を巻いて神に捧げるため、村も守れるという習慣がありました。だから村中は若い娘を探している中でたまたま、東京から来た母と娘が親戚がいる日光に訪れた。その時、村の連中が母娘を捕らえ、檻の中に入れた。母と娘は必死に脱走したくても、食事を持って来た女中やっているツンボ女に話しかけても、笑顔だけで通じなかった。だんだん、なんとなくツンボ女は気が「なぜ、母と娘は檻の中にいるの？」と疑問し、村の連中が「寺院の柱に犠牲してもらうのは、娘がいいぜ！」と話し合っているのを見て気が付いた。ツンボ女は檻の中から見逃がしてあげようと身振りしても、通じなくて母が気が付いて「まさか、私達を犠牲で捧げるとは…」と感謝をこめて逃げた。ツンボ女は恩人となったわけですが、この物語は実在に居たか、分かりません。やっぱり、不思議ですね。昔、なぜか啞者、ツンボを見かけたら、ここまで想像して書いたのか？この文学に関することを取り上げたのは、伊藤さんが発行した本からです。短くまとめて載せたけど、他に検索して詳しいのを読んでも、解釈出来なかったでした。

要望があります！このような古い文学は難しい文章表現しているから、それを訳して漫画本になればいいなあ！

伊藤 おやおや、取り上げたのは、びっくりしました。うむ、確かに漫画本へ訳したら、分かりやすいですね。実は、今、聾史に関する漫画本の作成中で進行しています。来年3月頃で発行する予定です。もちろん、私が書いた解釈付きも載せます。その時で楽しみして下さい。

司会 本当ですか？表紙からページの最後まで聾史漫画ですよ？それだったら、世紀初で凄くなりますね。楽しみです！すみませんが、聾女性が登場した日本文学物語は全て架空ですよ？

伊藤 うむ、架空と言っても、価値観はありますね。特に「源氏物語」紫式部は文章から想像につなげるという文才女史であり、認める位。ただの光景を見ても、深く文章を書けるこそ、世界一と言えますね。聾女性が登場した物語りも謎で…。探っても分からないですね。

司会 この資料収集したのは、物足りないですすみません。やはり、聾女性史を探る場合は聾男性からの見方、聾女性からの見方で結果になるまでのことを書く部分は全く異なっています。男性の場合は「こんな歴史があった！探してみたら分かった」という結果になるが、女性の場合は「こんな歴史があった！探してみたら、分かるような感じる」だと、なぜだろうね？今後も、皆さんも地元に戻って聾女性歴史を探ってみて下さい。来年の広島大会も今の分科会もあるか、分からないけど、情報交換出来る場があれば嬉しいと思います。そろそろ時間になりましたので、伊藤さん、助言をお願いします。

伊藤 昨日、今日も皆さんが討論し合って、初めての分科会だが、聾女性歴史は過去を見向いて研究するので、色んな資料を調べて探る必要があります。但し、想像だけでダメです。又、50年後に経った時、「50年前でそうだった」というような出来上がる資材は今の研究の成果を考える必要があります。

司会 お疲れ様でした。特に聾女性年配の方が語って頂けてありがとうございました。

## 日本文学の中の聾啞女性資料

■平安時代「源氏物語」の常夏の巻原文「その気近く入り立ちたりけむ大徳こそは、あぢきなかりけれ。ただその罪の報いととなり、啞、言、どもりとぞ、大乘そしりたる罪にも、数へたるかし」

■「今昔物語」の石山観音霊験談

乳母の育てられた啞の女の子物語です。又、別に異説もあります。

■「聾啞の女性・お梶」

母娘を救った心優しい聾啞の女性の物語です。

■「浄瑠璃の中の聾啞の女性」

大阪の人形芝居竹本座「三莊太五人嬢」の一節には聾啞の女性が登場し、手真似が描写されています。

■その他

参考資料

引用先：「歴史の中のろうあ者」